

琉球大学学術リポジトリ

詠み歌琉歌の基礎的研究 『琉球新報』 『沖縄毎日新聞』 に掲載された大正期の琉歌

メタデータ	言語: 出版者: 前城淳子 公開日: 2009-06-12 キーワード (Ja): 琉歌, 詠み歌, データベース, データベース化, 節組琉歌集 キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10907

2 琉歌大会詠

大正元年一月四日付「沖毎」第一三七四号

琉歌大会

第八回琉歌大会は既報の如く伊江男爵邸に於て開催さる和

歌兼題「秋夜勉学」「武士」琉歌兼題「晩秋」「寄獣恋」の披

露あり会員は当座題「占恋」「述懐不一」□詠作をなしたり

今回は何故か会者少く三十余名許しか集らざりき天地人入

選並に点者詠下の如し

晩秋

兼題

点者伊江朝眞

天

名護朝直

1 紅葉の露も霜とおきかへてにやまたこの秋も暮て行きゆさ

地

仲尾次盛孝

2 暮て行く秋の惜さあてからと散れるもみち葉も糸にのきゆる

人

知念政置

3 声のある限りなきやんてい虫のくれて行く秋やとめもならぬ

点者伊江朝眞

4 世の中の人と別ゆる秋のなこりあて霜のしげくふたら

寄獣恋

兼題

点者伊江朝眞

天

渡嘉敷通昆

5 つらさ身やあはれ牛よりも勝て卸すまやないらぬ恋の重荷

地

糸満朝庸

6 もつれいく先や牛になてたいんす里か小車やひかな置ゆめ

人

稲福全名

7 馬にのてたいんすわ肝あしかちゆさ無蔵か待ち兼る時分とめは

点者伊江朝眞

8 門守る犬のもしか声たてて無蔵か上にとかのあらはきやしゆか

大正元年一月五日付「新報」第四四八五号

琉歌大会

晩秋

点者伊江朝眞

天

名護朝直

9 紅葉の露も霜とおきかへてにやまたこの秋も暮し行きゆさ

地

仲尾次盛孝

10 暮て行く秋の憎さあてからと散ゆるもみち葉も糸にぬきゆる

人

知念政置

11 声のある限りなきやんてい虫のくれて行く秋やとめもならぬ

点者伊江朝眞

12 世の中の人と別ゆる秋のなこりある霜のしげくふため

大正元年一月六日付「新報」第四四八六号

琉歌大会

寄獣恋

点者伊江朝眞

天

渡嘉敷通昆

13 つらさ身やあはれ牛よりも□て卸すまやないらぬ恋の重荷

地

糸満朝庸

14 もつれいく先や牛になつてたいんす里か小車やひかな置ゆめ

人

稲福全名

15 馬になてたいんすわ肝あしかちゆさ無蔵か待ち兼る時分とめは

点者伊江朝眞

16 門守る犬のもしか声たてて無蔵か上にとかのあらはきやしゆか

大正元年一月七日付「沖毎」第一三七七号

琉歌大会

晩秋

点者伊江朝眞大人

仁

知念政置

17 紅葉かりしちゆてなくさみゆる秋もにや又夢の間に暮て行さ

義

高安朝常

18 七草の花も散りはてていきゆいちやし忘れゆか秋の名残

礼

渡嘉敷通昆

19 なく虫の声も日々にかれはててにや又この秋も暮て行ゆめ

智

佐久本孟教

20 暮て行く秋の惜さあるゆへか夜半になく虫の声のしけさ

信

高良睦輝

21 野辺の草むらの虫の音もかれて暮て行く秋も近くなため

寄獣恋

点者伊江朝眞大人

仁

松嶋朝京

22 かにもつれなさめ犬の門守て里をがむこ□の自由もならぬ

義

名護朝直

23 荷附馬たいんす卸す□やあすかおるちおるさらぬ恋の重荷

礼

久志安均

24 与所目まとはかて忍ていく無蔵か門守る犬の鳴はきやしゆか

智

濱川順達

25 門守る犬もこころあてわ身の恋忍ふ夜やおとち戻るな

信

大山朝眞

26 おもてからいまひない馬のいな鳴ひ垣間からすはい戸忍ていも
うり

大正元年一月九日付「新報」第四四八九号

琉歌大会

述懐非一

即題

点者伊江朝眞

天

伊江朝英

27 けふやのかやよら有し□々の思ひ身にあまて暮しくれしや

地

山里永昌

28 ねむる一時と浮世忘れゆるいつも胸中や千々の思ひ

人

稲福全名

29 なとやたたひとつ思事やあまた歲月やまたぬ過て行ひ

伊江朝眞

30 浮世小車につむかたもないらぬいたつらに朽さ千々の思ひ

大正元年一月九日付「沖毎」第一三七九号

琉歌大会

晩秋

点者伊江朝眞大人

秀逸

糸満朝庸

31 なまとまさかりのしら菊の花も与所になち秋や暮ていきゆめ

秀逸

糸満朝義

32 禁止のまし立てとめ置やならねおしむこの秋の暮て行す

秀逸

伊江朝英

33 なく虫の声も野辺のもも草も共にかれはてる秋のおしき

佳調

稲福全名

34 菊も色さめて虫の音もかすかにや又この秋も暮て行み

佳調

稲福全名

35 菊も紅葉もちりはてていけは髪におく霜と秋のかたみ

佳調

勢理客宗宣

36 みるもはかなさや長月の空の霜に枯りはてる庭の木の葉

大正元年一月一日付「新報」第四四九〇号

琉歌大会

占恋 即題

点者伊江朝眞

天

浦添朝長

37 時占すれば里とわか中や相生の松の千代のたとへ

地

山城宗隆

38 御□ひちかわち占ても二人が縁やきりきりす鳴るたとへ

人

具志頭朝重

39 むつりいくさきの二人が占方や梅と鶯のあかぬたとへ

点者伊江朝眞

40 さひしさのあまりなくさみにとたる恋のつちうらの肝にかかて

大正元年一月一日付「沖毎」第一三八〇号

琉歌大会

寄獣恋

点者伊江朝眞大人

秀逸

比嘉春株

41 門守る犬のおとし声のあすか若しか約束の里やあらね

秀逸

友寄景和

42 思ひねの空や月も入りさかて哀弥増すさ鹿の鳴声

秀逸

伊江朝眞

43 馬のいななけはまくさとてなけて音立ぬことに忍ていまうれ

佳調

渡慶次朝宣

44 行き戻り戻り忍ふ我がこころの馬の外に与所のしゆみ

佳調

渡慶次朝宣

45 逢はぬまつしたにやんはさす夜半のつらさいや増る鹿の鳴声

佳調

伊江朝眞

46 情あて駒も高くないななと所目ははかりのこよひたいもの

大正元年一月一日付「新報」第四四九一号

琉歌大会

兼題及即題（和琉歌）の三才と点者の詠歌は既に掲載せり以下順次其他の入選歌を連載す

兼題

晚秋

兼題

選者伊江朝眞

仁

知念政置

47 紅葉かりしちゆてなくさみる秋□にや又夢の間に暮て行き

義

高安朝常

48 七草の花もちりはてていきゆひいきやし忘れゆか秋の名残

礼

渡嘉敷通昆

49 なく虫の声も日々にかれはててにや又この秋も暮て行ゆめ

智

□久□□

50 暮て行く秋の情□□□ゆへか夜半になく虫の声の□□□

信

□□□□

51 野辺の草むらの虫の音もかれて暮て行く秋も近くなため

秀

糸□朝薫

52 なやとまさかりのしら菊の花も与所になち秋や暮ていきゆめ

秀

糸満朝義

53 禁止のまし立てとめ置やならねおしむこの秋の暮て行す

秀

伊江□英

54 なく虫の声も野辺□をを草も共にかれはてる秋のおしき

佳

稻福全名

55 菊も色さめて虫の□もかすかにや又この秋も暮て行ぬ

佳 稲福全名

56 菊も紅葉もちりはてていけは髪におく霜と秋の形見

佳 勢理客宗宣

57 見るもはかなさや長月の空も霜に枯りはてる庭の木の葉

大正元年一月一日付「沖毎」第一三八一号

琉歌大会

述懐非一 当座 点者伊江朝真大人

58 今日やのかやよら有し様様の思ひ身にあまて暮しくれしや

天 伊江朝英

59 ねむる□時と浮世忘れゆる何□も胸中や千千のおもひ

地 山里永昌

60 などやたたひとつ思事やあまた歲月やまたぬ過て行ひ

人 稲福全人

61 いちもつくさらぬかきもつくさらぬ麻のこと乱る千千の思ひ

仁 稲福全人

62 茹てもつくれらぬ思ひ出の草のわ肝まつふゆさ朝も夕さも

義 伊江朝英

63 とてもけららぬ身にあまる思ひおしくみつくみつくて鳴さ

礼 佐久本孟教

64 今日やのかかはてわ肝さまさまにもよ思つくす方もないらぬ

智 山川朝赴

65 いつからか我身のさまさまの思ひおるち与所なみに暮ちいちゆ

信 渡慶次朝宣

66 いつかささまの胸の浮雲もはらて有明の月もてゆら

秀 當銘朝穎

67 一事さへなさぬ年波やよひ数ならぬ我身の千千の思ひ

秀 諸見里朝奇

68 つれなさやこの身二つないぬしちゆて数多思ことの算やしらぬ

佳 比嘉賀徳

69 思ことや真砂一事さへわ身のなさなしゆて年の寄たる恨しや

佳 松嶋朝京

70 かにもつれなさみかつならぬわ身にあはれ思ことの果やないらぬ

佳 當銘朝穎

71 浮世小車につむかたもないらぬいたつらに朽さ千千の思ひ

点者伊江朝真

大正元年一月二日付「新報」第四四九二号

琉歌大会

寄獣恋 兼題 選者伊江朝真

72 かにもつれなさみ犬の門守て里をかむことの自由もならぬ

仁 松島朝京

73 荷附馬たいんす卸す間やあすかおるちおるさらぬ恋の重荷

義 名護朝直

74 与所目まとはかて思ていく無蔵か門守る犬の鳴はきやしゆが

礼 久志安均

75 門守る犬もこころあてわ身の恋忍ふ夜やおとち呉るな

知 濱川順達

信 大山朝真

- 76 おむてからいまひない馬のいな鳴ひ垣間からすはい戸忍ていも
うり
秀 比嘉□春株
- 77 門守る犬のおとし声のあすか若か約束の里やあらね
秀 友寄景和
- 78 思ひねの空や月も入りさかて衾弥増さ鹿の鳴声
秀 伊江朝薫
- 79 馬のいなけはまくさとてなけて音立ぬことに忍ていまいれ
佳 渡慶次朝宣
- 80 行き戻り戻り忍ふ我がこころの馬の外に与所のしゆみ
佳 渡慶次朝宣
- 81 逢ぬまつしたにやんわさす夜中のつらさ弥増る鹿の鳴声
佳 伊江朝英
- 82 情あて駒も高くいなくな与所目ははりの今宵たいもの
大正元年一月二日付「冲每」第一三八二号
琉歌大会
- 83 とき占すれば里と我かなかや相生の松の千代のたとへ
天 点者伊江朝眞大人
占恋 当座 浦添朝長
- 84 御籤ひちかはち占ても二人か縁やきりきりす鳴るたとへ
地 山城宗蔭
- 85 むつりいくさきの二人か占方や梅と鶯のあかぬたとへ
人 具志頭朝重
- 86 かに嬉しきさみときうらなすれはひよくうし島の縁のたとへ
仁 名護朝直

- 87 むしか思無蔵とあはぬてのつけの櫛うらのあらはわ身やちやし
ゆか
義 高安朝常
- 88 つつしまななゆみ里とわかなかの口ことのたちゆる占たいもの
礼 諸見里朝奇
- 89 いちやかなていちゆる二人か中川やいつも浪風的美籤たいもの
智 當銘朝顛
- 90 むすはれかしてひら占なやひたはふれ親にゆるさらぬ二人か御
信 山里永昌
- 91 ときはんしからも里とわか中やあかぬ寄糸の御縁さらめ
秀 大山朝眞
- 92 かに嬉しきさめ里や魚こころわ身や水んての御籤やれば
秀 山城宗蔭
- 93 な□さみに呼たる辻占やあらぬ里か夢肝にかかてをてと
秀 伊江朝英
- 94 こころおてつかぬうらなやいみれは嬉しきや星も□もよたしや
佳 湖城惠宏
- 95 約束のこよひやかていまいらやすかまち兼て我身や美籤ひちゆ
佳 美里朝珍
- 96 かはるなよ互にときのくまゆたも一期ままたのうらないたい
もの 佳 渡嘉敷□昆
- 97 さひしさのあまりなくさみにとたる恋のつちうらの肝にかかて
点者伊江朝眞

大正元年一月一四日付「新報」第四四九四号

琉歌大会

述懐非一 兼題

選者伊江朝眞

仁

稻福全名

いち□つくさらぬかきもつくさらぬ麻のこと乱る千々のおもひ

義

伊江朝英

茹てもつくれらぬ思ひ出の草のわ肝まつふゆさ朝も夕も

礼

佐久本孟教

とてもけららぬ身にあまり思ひおしつくみつくみつくて鳴さ

智

山川朝□

けふやのかかはてわ肝様々にもよ思つくす方もないらん

信

渡慶次朝宣

いつからかわ身のさまさまの思ひおるちよ所なみに暮ちいちゆら

大正元年一月一五日付「新報」第四四九五号

琉歌大会

述懐非一 兼題

伊江朝眞

秀

當銘朝頼

いつか様々の胸の浮雲もはらて有明の月もてゆら

秀

諸見里朝奇

一事さへなさぬ年浪やよよひ数ならぬわ身の千々の思ひ

佳

比嘉賀徳

つれなさやこの身二つないぬしちゆて数多思事の算やしらぬ

佳

松島朝京

思事や真砂一事さへわ身のなさなしゆて年の寄たるらめしや

大正元年一月一七日付「新報」第四四九七号

琉歌大会

占恋 即題

選者伊江朝眞

仁

名護朝直

かにも嬉れしさみ時うらないすれはひよくうし鳥の縁のたとへ

義

高安朝常

もしか思無蔵とあわぬてのつけの浦うらのあらはわ身やきやし

礼

諸見里朝奇

つつしまななゆみ里とわか中の口事のたちゆる占たいもの

智

當銘朝頼

いきやかなていちゆら二人か中川やいつも浪風のみ□たいもの

信

山里永□

むすはれかしやひら占なやひたほふれ親にゆるさら□二人か御

縁

時はんしからも里とわか中やあかぬ寄糸の御縁さらめ

秀

大山朝眞

かにも嬉しさめ里や魚ころろわ身や水んての御□やれは

秀

山城宗蔭

なくさみに呼たる辻占やあらぬ里か夢肝にかかてをてと

佳

伊江朝英

こころおてつかぬうらなやいみれは嬉しさや星も運もよたしや

佳

湖城恵宏

かにもつれなさみかつならぬわ身に念思事の果やないらぬ

佳

當銘朝頼

117 佳 美里朝珍
約束の今宵やかていまいらやすかまち兼てわ身や美□ひちゆさ

118 佳 渡嘉敷通昆
かはるなよ互に□のくまゆたも一期ままんでのうらないたいも
の

大正二年四月二二日付「沖毎」第一五三六号
第九回琉球歌会

第九回琉球大会は一昨二十日午前十時より伊江男爵邸に於
て開催さる會員四十余名参会ありて当座題(僧)を詠じて
後酒宴に移り盛会なりしと兼題当選歌は左の如し

三国志を讀みて 点者伊江朝眞大人

119 天 糸満朝義
浮世とりさたのいつまでもくちゆめ琴の音にてきのかこみとき
やす

地 糸満朝義

120 人 知念棚敦
ふる雪もおかち野辺にふす龍の住家尋たす世々のかかみ

君国のために生死も一道ちきりかたみたるみつのはしら

仁 與那原良儀

122 義 名護朝直
思子たちなけな身にきすもつかぬかこみ出たすや君のいさを

123 礼 伊江朝薫
三度たつねられ柴の戸よ出る小車の音や高くたちゆさ

124 智 山城正常
魚の水得たる喜よむくてたてるいさをしや世々のかかみ

125 信 糸満朝庸
桃のしたかけに天と地は祭てちきるますらをや世々のかかみ

126 秀 稲福全名
三国弓ひきやるむかし世の事もかけうち見ゆる文の鏡

127 秀 松島朝京
人の生立やかねてしられらぬくつおたる人の帝なたさ

128 秀 高江洲昌壯
いつし名の朽かむかし赤壁に勝軍しちやる人のいさを

129 佳 新崎盛相
死する身になても生る人にまさててきの武士もちらちむちやさ

130 佳 大宜見朝隆
むかし三国のかなへあらそへも引寄て見ゆさふみのかかみ

131 佳 点者伊江朝眞大人
雪にたつねたる人の真ころにふしてをる龍の出るしほらしや

132 月日ある間の世の中のかかみきにいくさ出す文のまこと

大正二年四月二三日付「沖毎」第一五三七号
第九回琉球歌会

恋天象 兼題 点者伊江朝眞大人

天 川平恵許

133 地 山城宗蔭
天の河渡る星のことたいんす稀やちやうん吸る御縁やらな

134 西さかるてたものきやかよる月も見れはおもかけの種子となゆ
る

人 山川朝棟

135 御日御月こころ行きめぐりめぐりめぐて振合しゆる御縁やらな

136 仁 屋嘉比政兄
里や雨ふりのそらの星こころ御行逢拜むこともまれになたさ

137 義 糸満朝義
天の星こころまれにふやはちもきもや朝夕さもお側さらめ

138 礼 高安朝常
照る月のかけに一目見ちやる人のおもかけやいつもきもにすか

139 智 翁長良才
そらにみちあまる浮雲のこころ朝夕もの思のはてやないらん

140 信 東恩納盛賢
おもひこかれゆるむねうちのけふりそらにたなひきゆる雲とな
ゆら

141 秀 野崎真秀
そらの浮雲や風ままになひく里ままになれるわ身のこころ

142 秀 渡慶次朝宜
そらにてり渡る月と日のことにおそひかくさらぬ二人か中や

143 佳 名護朝直
月のみちかけのかはゆすにならてきもかはて呉るなかなし御縁

144 佳 高原安光
のちものかれらぬ押風とつれて行衛さたまらぬ雲のこころ
点者伊江朝真

145 天の川原ももみちから渡て星もふやはしゆる御縁やすか

146 天 川平恵許
天の川渡る星のことたいんす稀やちやうん吸る御縁やらな

147 地 山城宗蔭
西さかるてたものきやかよる月も見ればおもかけの種子となゆ

148 人 山川朝棟
御日御月こころ行きめぐりめぐりめぐて振合しゆる御縁やらな

149 仁 屋嘉比政兄
里や雨ふりのそらの星こころ御行逢拜むことも稀になたさ

150 義 糸満朝義
天の星こころ稀にふやわちも肝や朝夕さもお側さらめ

151 礼 高安朝常
照る月の影に一目見ちやる人のおもかけやいつも肝にすかて

152 智 翁長良才
空にみちあまる浮雲のこころ朝夕もの思のはてやないらん

153 信 東恩納盛賢
思ひ焦りゆるむねうちのけふり空にたなひきゆる雲となゆら

154 秀 野崎真秀
空の浮雲や風ままになひく里ままになれるわ身のこころ
渡慶次朝宜

155 秀 名護朝直
そらに照り渡る月と日のことにおそひかくさらぬ二人か中や

156 佳 高原安光
月のみちかけのかはゆすにならて肝かはて呉るなかなし御縁

157 佳 名護朝直
のちものかれらぬ押風とつれて行衛さたまらぬ雲のこころ
点者伊江朝真

大正二年四月二四日付「新報」第四六四八号
第九回琉歌大会 四月廿日
恋天象 兼題 点者伊江朝真

158 天の川原ももみちから渡て星もふやはしゆる御縁やすか

大正二年四月二五日付「新報」第四六四九号

第九回琉球大会 四月廿日

三国志を讀て 兼題 点者伊江朝眞

天 糸満朝義

159 浮世とり沙汰のいつまでもくちゆみ琴の音にてきのかくみとちやす

地 糸満朝義

160 ふる雪もおかち野辺にふす龍の住家尋たす世々のかかみ

人 知念棚敷

161 君国のために生死も一道契りかたみたるみつのはしら

仁 與那原良儀

162 思子たちなけな身にきすもつかぬかくみ出たすや君かいさを

義 名護朝直

163 三度たつねられ柴の戸よ出る小車の音や高くたちゆさ

礼 伊江朝薫

164 魚の水得たる喜よむくてたてるいさをしや世々のかかみ

智 山城正常

165 桃のしたかけに天と地は祭て契るますらをや世々のかかみ

信 糸満朝庸

166 三国弓ひきやるむかし世のこともかけうつち見ゆる文のかかみ

秀 稲福全名

167 人の生立やかかねてしらぬくつおたる人の帝なたさ

秀 松島朝京

168 いつし名の朽かむかし赤壁に勝軍しちやる人のいさを

169 死る身になても生る人にまさててきの武士もちちちむちやさ

秀 佳 高江洲昌壯 新崎盛相

170 むかし三国のかなへあらそへも引寄て見ゆさふみのかかみ

佳 大宜見朝隆

171 雪にたつねたる人の真心にふしてをる龍の出るしほらしや

点者伊江朝眞

172 月日ある間の世の中のかかみきにくさ出す文のまこと

大正二年四月二六日付「沖毎」第一五四〇号

第九回琉球歌会

僧 当座 点者伊江朝眞大人

天 名護朝直

173 法のみちしはにこころきはみやひ世のちりもすまぬ苔の衣

地 與那原良義

174 たとひ山寺にわひ住ゆしちも肝や百八の玉の光

人 比嘉賀徳

175 くら闇にまよて行く人のために真路あからす法のとほし

仁 比嘉賀徳

176 世のちりも立ぬ深山古寺にみかく真心や瑠璃の鏡

義 屋嘉比政兄

177 法の玉水にわかつてこころ洗て朝夕たつねゆさ雪の山路

礼 眞壁朝可

178 浮世ものことも与所にしち朝夕あかの水くぬる法のひじり

智 知念政置

179 法の燈火にわ肝あからち迷ゆたる浮世夢も見たぬ

180 信 糸満朝庸
よのちりもはらてふみわけていゆさ鷺の尾の山の法のはやし

181 秀 比嘉賀徳
峯の松風に世のちりは払て清てきかれゆる法のみ声

182 秀 大山朝眞
世のちりもつかぬ法の路まもてこころ清みゆさ朝も夕さも
佳 高安朝常

183 浮世はなれとてのりのしや朝夕むねのちりはらてさひやないさ
め 佳 糸満朝義

184 世のちりもはらて法の路筋に心さためたる人のしゆらしや
佳 点者伊江朝眞

185 法のしのみもやのさひもつかぬすみて照わたる御月こころ

大正二年五月六日付「新報」第四六六〇号
第九回琉歌大会

僧 当座 天 名護朝直

186 法のみちしはにこころきよみやひ世のちりもすまぬ苔の衣
地 與那原良義

187 たとひ山寺にわひ住ゆしちも肝や百八の玉の光
人 比嘉賀徳

188 くら闇にまよて行く人のために真路あからす法のとほし
仁 比嘉賀徳

189 世のちりも立ぬ深山古寺にみかく真心や瑠璃の鏡
義 屋嘉比政兄

190 法の玉水にわかこころ洗て朝夕たつねゆさ雪の山路
礼 眞壁朝可

191 浮世ものことも余所にしち朝夕あかの水くぬる法のひじり
智 知念政置

192 法の灯火にわ肝あからち迷ゆたる浮世夢も見たぬ
大正二年五月九日付「新報」第四六六三号
第九回琉歌大会

僧 当座 信 点者伊江朝眞
糸満朝庸

193 よのちりもはらてふみわけていゆさ鷺の尾の山の法のはやし
秀 比嘉賀徳

194 峯の松風に世のちりは払て清てきかれゆる法のみ声
秀 大山朝眞

195 世のちりもつかぬ法の路まもてこころ清みゆさ朝も夕もさも
佳 高安朝常

196 浮世はなれとてのりのしや朝夕むねのちりはらてさひやないさ
め 佳 糸満朝義

197 世のちりもはらて法の道筋に心さた□たる人のしゆらしや
佳 点者伊江朝眞

198 法のしのみもやのさひもつかぬすみて照わたる御月こころ

大正二年一〇月一三日付「新報」第四八一七号

第十回大会琉歌 十月十二日 兼題 点者伊江朝眞
寄橋恋

211 橋のはし守もなさけあて今宵つれてわたたんで語て呉るな
 210 波に袖ぬらち別る暁に渡りかたなさや恋の小はし
 209 橋もりの人の情あて二人か袖合いく先やしらち呉るな
 208 袖合たる袖合りかはるなよ互に左京の橋こへてあのよまでも
 207 しあんてる橋もしりなけなわ身の引かさりて渡る恋の習や
 206 老のしからみかとし波もよらぬわたて楽る恋の小はし
 205 夢や通わちも逢ぬいたつらにうらみ積て戻る恋の小橋
 204 いちやかなたてをゆら仲島の小はし渡てかたらたる人の行衛
 203 禁止られて居ても思ひ仲川に縁や橋かけて節と待ゆる
 202 みつみてやをすか橋やかけららぬ思ひ焦れゆさ恋のわたり
 201 ゆき戻り戻りあはぬ仲島の橋にちる涙やうみとなゆら
 200 西の新埋地橋かけてたほうち縁のかよわしのたよりなたさ
 199 夢の浮橋のしけくかかゆすか御行逢拜む節のちかくなたら

天 名護朝直

地 神山處如

人 勝連貞

仁 久志安均

義 比嘉賀徳

礼 具志頭朝香

智 名護朝直

信 糸満朝義

秀 具志川朝及

秀 花城朝忠

佳 金武正宣

佳 具志頭朝重

点者伊江朝眞

222 月やかたふきも明日やのちやかゆいなつかしやわか世ふけるは
 221 月前述べ懐 兼題 十月十二日 点者伊江朝眞
 220 名に立ゆる月も幾度詠めゆかなつかしや此身年やよたい
 219 老のさかのほてなかみれば月になこりたちましゆさ花の昔し
 218 月も詠めとて与所や遊ふすか我身や物思の種となゆる
 217 昔し打まらて詠めたる同志の面影ゆうつす月のかかみ
 216 老の年波のよゆることおめは秋の月しらや名残り立さ
 215 詠めゆる月や嬉しやなくれしやも肝のままうつるかかみさらめ
 214 月も詠めればよたる年波のなこり照りまさてつらさはかり
 213 昔し打まらて詠めたる同志の面影ゆうつす月のかかみ
 212 老のさかのほてなかみれば月になこりたちましゆさ花の昔し

大正二年一〇月一三日付「沖毎」第一七〇六号
 琉歌大会 十月十二日

天 川平恵許

地 屋嘉比政兄

人 糸満朝庸

仁 兼島景福

義 久志安均

礼 松嶋朝景

智 與那原良能

信 仲濱政模

秀 比嘉賀徳

秀 山里永昌

佳 山城宗蔭

かり

佳

山城宗得

空に照る月やあんきゆらさあすかはつかしやわ肝いつもくもて

点者伊江朝眞

ゑの月とやすかならはしとつれてこころうちやかゆさ秋の今宵

大正二年一〇月一四日付「新報」第四八一八号

第十回大会琉歌

十月十二日

月前述懐

兼題

点者伊江朝眞

天

川平恵許

名に立ゆる月も幾度詠めゆかなつかしや此身年やよたい

地

屋嘉比政兄

老のさかのほてななみれは月になこりたちましゆさ花の昔し

人

糸満朝庸

月も詠めればよたる年波のなこり照りまさてつらさはかり

仁

兼島景福

昔し打よらて詠めたる同志の面影ゆうつす月のかかみ

義

久志安均

老の年波のよゆることおめは秋の月しらや名残たちゆさ

礼

松島朝京

詠めゆる月や嬉しやなくれしやも肝のままうつるかかみさらめ

智

與那原良能

月も詠めとて与所や遊ふすか我身や物思の種となゆる

信

仲濱政摸

昔しから月やゑの月とやすかなかめゆる人や千々にかはて

秀

比嘉賀徳

233

年波やよたいにや又いつまでか寄合てななみゆらけふの御月

秀

山里永昌

234

こころ満たすなよ空に照る月もみては又かけるならひたいもの

佳

山城宗隆

235

月やかたふきも明日やのちやかゆいなつかしやわか世ふけるは

かり

佳

山城宗得

236

空に照る月やあんきゆらさあすかはつかしやわ肝いつもくもて

点者伊江朝眞

237

ゑの月とやすかならはしとつれてこころうちやかゆさ秋の今宵

大正二年一〇月一四日付「沖毎」第一七〇七号

第十回琉歌大会

寄橋恋

兼題

点者伊江朝眞

天

名護朝直

238

夢の浮橋のしけくかかゆすか御行逢拜む節のちかくなたら

地

神山處如

239

西の新埋地橋かけてたほうち縁のかよはしのたよりなたさ

人

勝連貞

240

ゆき戻り戻りあはぬ仲島の橋にちる涙やうみとなゆる

仁

久志安均

241

みつみてやをすか橋やかけららぬ思ひ焦れゆさ恋のわたり

義

比嘉賀徳

242

禁止られて居ても思ひ仲川に縁や橋かけて節と待ゆる

礼

具志頭朝香

243

いちやかなてをゆら仲島の小江渡てかたらたる人の行衝

- 244 智 名護朝直
夢や通わちも逢ぬいたつらにうらみ積て戻る恋の小缸
- 245 信 糸満朝義
老のしからみかとし波もよらぬわたて樂る恋の小はし
- 246 秀 具志川朝及
しあんでる橋もしりなけなわ身の引かさりて渡る恋の習や
- 247 秀 花城朝忠
袖合たる袖合りかはるなよ互に左京の橋こへてあのよまでも
- 248 佳 金武正宣
橋もりの人の情あて二人か袖合いく先やしらち呉るな
- 249 佳 具志頭朝重
波に袖ぬらち別る暁に渡りかたなさや恋の小缸
- 250 点者伊江朝眞
橋のはし守もなさけあて今宵つれてわたたんで語て呉るな
- 大正二年一〇月一七日付「沖毎」第一七一〇号
第十回琉歌大会
- 251 文 当座 点者伊江朝眞
天 山城宗得
みつきの跡や世の中のたからむかしことまでもしゆる嬉しや
- 252 地 當銘朝顯
鳥のふみのこすあとのないぬあればいきやし尋ゆか人の真路
- 253 人 具志川朝及
すすむ世の中やみやこからひなも文の声と聞さ朝も夕さも
- 254 仁 高良睦輝
おこたらぬことに文やよめ童部人の道知ゆるもとゐやれば

- 255 義 山城宗得
かほしらぬ人と友なゆる中もわ肝かきなす文のあてと
- 256 礼 濱川順達
文や世の中のものし火のこころやみの路てらす便りなたさ
- 257 智 屋嘉比政兄
渡海やひさめても□□のあれはたかひにかよわしゆす文とたのむ
- 258 信 具志頭朝香
つてもつくりらぬ見ちもつくりらぬひしりかしこきの残す言葉
- 259 秀 比嘉賀徳
手にとやい見れば与所国のことも居ちゆてしられゆる文のかかみ
- 260 秀 渡慶次朝宣
むかし様様も今の世のことも居ながらに見ゆさ文のかかみ
- 261 佳 名護朝直
弓矢とる人も筆の花さかち遊ひ樂みゆさ文のはやし
- 262 佳 比嘉賀徳
ふみのこち置ある鳥の跡便てむかし世のこともさとして行ゆさ
- 263 点者伊江朝眞
いつの夜のゆめに筆の花さかちにほひ世の中に高く立か
- 大正三年一月三〇日付「新報」第四九二〇号
琉歌大会
- 264 新年梅 兼題 伊江朝眞大人選
仁 花城朝忠
庭に咲く梅の匂やわか袖につつて嬉しさとしのはしめ

- 265 新玉の年にうれしや重ねたさ梅も咲き初て匂ひ立ゆひ
義 久志安均
礼 嵩原松亭
- 266 窓に咲く梅の匂にうきやかゆさ新玉の年の祝の座敷
智 勢理客宗宣
- 267 新玉の年のふこひ声とつれて笑て咲く梅の千代の匂ひ
信 仲濱政模
- 268 都からことしくたちきやる梅のはつ日打迎て咲るうれしや
秀 兼濱朝珂
- 269 新玉のとしに梅の花活て嬉しこと語る友と待る
秀 伊江朝薫
- 270 年のあけあけに梅の花いけてしんやきやらとほす御座の心地
- 大正三年二月一日付「新報」第四九二二号
琉歌大会 大正三年一月四日
- 271 屠蘇の盃にしほらし匂添て庭の是の花の咲やる美さ
秀 比嘉賀徳
- 272 初年と共に庭にさく梅の朝日さす方に咲る清さ
佳 翁長良才
- 273 初年の祝の御座敷に向て咲出たる梅の匂のしほらしや
佳 兼島景福
- 274 松と竹あはち素立たる梅のひらき年ほきの飾りなたさ
佳 渡久山朝是
- 275 新玉の年の祝の盃に梅の匂うつち吞かうれしや

- 276 年のあけあけにうれしかほ見せて咲出たる梅の花の清さ
佳 久志安均
- 277 寅年の元日わか石嶺のなり所の池のほとりにうめの花三つ四つ咲
きけるを見て
点者伊江朝眞
- 278 世かほよの落穂ひろてむらすすめ千代千代と鳴る声のしほらし
や
天 諸見里朝奇
- 279 あかつきのねさめ聞もたのしさや朝夕素立ゆるとりのはつ声
地 渡慶次朝宣
- 280 老の身の朝夕伽になるものや籠にそたてゆる鳥の鳴声
人 比嘉春株
- 281 峯の松原に遊ぶともつるの千代の声や高くそらにひひき
仁 比嘉賀徳
- 282 我宿と野山行きもとりもとり朝夕むつましく遊ぶすすめ
義 稻嶺盛治
- 283 朝ことに老の慰になゆさ千代千代と鳴る朝の雀
礼 翁長良才
- 284 文よ読も人の声にあらそひてたひ間ないんふける籠の目白
智 具志川朝及
- 大正三年四月二六日付「沖毎」第一八九二号
日曜会第十一回琉歌大会

- 285 信 比嘉賀徳
常盤なる松に千代の宿せめて遊ぶ友鶴のなたる美さ
- 286 秀 上江洲由壽
間も嬉しさや明雲とつれて千代千代とふける庭の雀
- 287 秀 嵩原安光
鳥たいんすふけるよしあしやわかちまさる声きけは学て行ゆさ
- 288 佳 比嘉賀徳
いつも朝起のなくさめになゆさ庭の榕にふける目白
- 289 佳 稻福全名
老のなくさみや今夜も明きたんてうれしやけさ告る鳥の初声
- 290 点者伊江朝眞
とりも暁や時たかぬ鳴ひおこたるなわらへ日々つとめ
- 大正三年四月二七日付「新報」第五〇〇四号
第十一回琉歌大会
- 291 鳥 兼題 伊江朝眞
天 諸見里朝奇
世かほよの落穂ひろてむらすめ千代千代と鳴る声のしほらし
- 292 地 渡慶次朝宣
あかつきのねさめ間もたのしみや朝夕素立ゆるとりのはつ声
- 293 人 比嘉春株
老の身の朝夕伽になるものや籠にそたてゆる鳥の鳴声
- 294 仁 比嘉賀徳
義 稲嶺盛治
峯の松原に遊ぶともつるの千代の声や高くそらにひひき

- 295 我宿と野山行きもとりもとり朝夕むつましく遊ぶすめ
- 296 礼 翁長良才
朝ことに老の慰めになゆさ千代千代と鳴る軒の雀め
- 297 智 具志川朝及
文よ読も人の声にあらそひてたひ間ないんふける籠の目白
- 298 信 比嘉賀徳
常磐なる松に千代の宿せめて遊ぶ友鶴のなたる美さ
- 299 秀 上江洲由壽
間も嬉しさや明雲とつれて千代千代とふける庭の雀め
- 300 秀 嵩原安光
鳥たいんすふけるよしあしやわかちまさる声きけは学て行ゆさ
- 301 佳 比嘉賀徳
いつも朝起のなくさめになゆさ庭の榕にふける目白
- 302 佳 稻福全名
老のなくさみや今夜も明きたんてうれしやけさ告る鳥の初声
- 303 点者伊江朝眞
とりも暁や時たかぬ鳴ひおこたるなわらへ日々つとめ
- 大正三年四月二七日付「沖毎」第一八九三号
日曜会第十一回琉歌大会
- 304 花便 兼題 点者伊江朝眞
天 阿波根朝祥
うれし音信ゆきちゆんてかやたら花の面影のまさてをたす
- 305 地 山城宗蔭
人 山城宗得
詠めらぬ先にこころ浮かゆさまちかねる花のたよりきけは

- 306 馬にくらかけれ野辺も山の端も花のまさかりのつけのあもの
仁 金武正宣
- 307 みよしのの花の音信やきちゆて見る隙もないらぬ春やすくち
信 神山處如
- 308 音信よききゆて嬉しやしちをんてもとて花当にかたて呉れよ
礼 高原安光
- 309 春雨やふてもいそぎ行ち見ほしやおとにきく吉野花のさかり
智 森田孟徳
- 310 詠めふしやあものたんてあや蝶さく花の便り聞き呉よ
信 當銘朝頼
- 311 かねて山守に頼てあるはなのうれし音信やいつかあゆら
秀 比嘉賀徳
- 312 しらち呉る人の言の葉も香はしや美吉野の山の花のさかり
秀 神山處如
- 313 音信よききもこころとひ立さ美吉野の山の花のもとに
秀 稻福全名
- 314 霞ふみ分きて急き行ち見たなまち兼る花の盛てもの
佳 吉里眞仁
- 315 花の咲をものいまうち御見かけり老のなくさみもなひか召ら
佳 名嘉地憲敷
- 316 咲く花の便り聞きなけな今年いたつらにすくす春の月日
佳 比嘉賀徳
- 317 駒に鞍かけていそぎ打ち見たね美吉野の花や咲んてもの
点者伊江朝眞
- 318 明雲のたは馬に鞍おそれ野守からはなの便あもの

大正三年四月二十九日付「新報」第五〇〇六号
第十一回琉歌大会

花便 兼題

点者伊江朝眞

天

阿波根祥

319 うれし音信ゆきちゆんてかやたら花の思影のまさてをたす

地

山城宗蔭

詠めらぬ先にこころ浮かれゆさまちかねる花のたよりきけは

人

山城宗得

320 馬にくらかけれ野辺も山の端も花のまさかりのつけぬあもの

仁

金武正宣

321 みよしのの花の音信やきちゆて見る隙もないらぬ春やすくち

義

神山處如

322 音信よききゆて嬉しやしちをんてもとて花当にかたて呉れよ

礼

高原安光

323 春雨やふてもいそぎ行ち見ほしやおとにきく吉野花のさかり

智

盛田孟徳

324 詠めふしやあものたんてあや蝶さく花の便り聞き呉よ

信

當銘朝頼

325 かねて山守に頼てあるはなのうれし音信やいつかあゆら

秀

比嘉賀徳

326 しらち呉る人の言の葉も香はしや美吉野の山の花のさかり

秀

神山處如

327 音信よききもこころとひ立さ美吉野の山の花のもとに

秀

稻福全名

328 霞ふみ分きて急き行ち見たな待兼る花のさかりてもの

佳

吉里眞仁

330 花の咲をものいまうちお見かけり老のなくさみもなひか召ら
佳 名嘉地憲敷

331 咲く花の便り聞きなけな今年いたつらにすくす春の月日
佳 比嘉賀徳

332 駒に鞭かけていそぎ行き見たね美吉野の花や咲んてもの
点者伊江朝眞

333 明雲のたたは馬に鞍おそれ野守からはなの便あもの
伊江朝薫

334 梅かえに宿る深山鶯もにやまた咲く花の便り待ちゆら
(修正) 第一句梅に宿かたる

比嘉まつこ

335 今盛りたいもの押列ていまふり無情の雨風□吹かはきやしゆか
(修正) 第一句花も今盛り第四句無情の山嵐の第五句吹かぬ

中に

佐久本孟教

336 つれていかはへるきけは中城花の本伊舎堂花のさかひ
(修正) 第五句さかりてもの

右の歌はかく修正せは天地人にまさるもおとる事なしとおもへ侍へれと大会の規定には一字とても修正はならずとありしゆへ止事なく撰外になしたるは遺憾に堪ぬ

大正三年四月三〇日付「沖毎」第一八九六号

日曜会第十一回琉歌大会 四月十九日

花便 兼題

伊江朝薫

337 梅かえに宿る深山鶯もにやまた咲く花の便り待ちゆら

(修正) 上句梅に宿かたる

比嘉まつ子

338 今盛りたいもの押列ていまふり無情の雨風の吹かはきやしゆか
(修正) 上句花や今盛り下句無情の山嵐のふかんに

佐久本猛敦

339 つれていかはへるきけは中城花の本伊舎堂花のさかひ
(修正) 下句さかりてもの

右の歌はかく修正せば天地人にまさるもおとる事なしとおもへ侍へれと大会の規定には一字とても修正はならずとありしゆへ止□なく撰外になしたるは遺憾に堪ぬ(朝眞)

大正三年一月一日付「沖毎」第二〇八六号

第十二回琉歌大会

初冬 兼題

天

点者伊江朝眞

稻福全名

340 月と紅葉にうかれたる秋もいな過て冬の時雨ふゆさ
地 高江洲昌壯

341 千鳥なく声のしけくきかれゆすなみのはな咲ゆる冬になため
人 浦添朝長

342 紅葉狩りしゆたる秋もいなくて時雨さきたてて冬や着め
仁 山城宗得

343 にしき織なちやる紅葉もちりて霜の花むすふ冬になたさ
義 山城宗隆

344 月にうかれたる秋も行くれて雪に歌よみゆる冬になたさ
礼 嘉數朝睦

345 宵の間に冬や立ちかはてさらめ暁の空に時雨降ゆす

346 秋に詠たるもみち葉もちれて霜の花さちゆる冬になたさ
智 兼嶋景福

347 節もたちかはて小春なてをすか鶯やなかぬ霜とふゆる
信 名護朝直

348 夜あけしらしらと打しくれしくれ音たてて冬やめくてきちやめ
秀 神山處如

349 初霜とつれて梅の一枝に花の咲そめる小春なたさ
秀 名護朝直

350 もみち葉もちりて庭のときは木の操あらはしゆる冬になたさ
佳 高安朝常

351 秋のかなしさも夢の間に過て草葉色染る霜とふゆさ
佳 宮城能文

352 秋やくれはてて行衛しら露の結てはつ霜の庭におきやさ
点者伊江朝眞

大正三年一月二日付「沖毎」第二〇八七号
第十二回琉歌大会

青島陥落を祝て 当座 点者伊江朝眞

353 青島も落ち□□からの先やさはくあた波も静かなよら
天 伊江朝英

354 うらめあるてきのとりてせめ落ちすきし我御主も嬉しやめせら
地 知念績昌

355 あたの白旗や青島になひち海も波しつかなたる嬉しや
人 兼嶋景福

356 待ちかねてをたる青島も落てかちときの音や四方にひひち
仁 諸見里朝奇

357 青島よとたるかちときの声にはた年の恨みはれていちゆさ
義 伊江朝薫

358 青島のてきも安安と落ち光かかやかす美代の嬉しや
礼 大山朝眞

359 かためたる砦せめ落す今日や四方にとろちゆら大和魂
智 稻福全名

360 勝軍しちやる今日の喜やいちもつくされめ上も下も
信 松島朝京

361 むかし唐土とたたかひの時の身にあまる恨み□□やそそち
秀 伊江朝英

362 豊青島のとりて攻落ちはた年の恨みそそく嬉しや
佳 伊江朝□

363 砦せめ落ち日の御旗たてて万世の声や空にひひき
点者伊江朝眞

364 二昔先の恥そそき今日や歌うたて遊ふ上も下も
点者伊江朝眞

大正三年一月三日付「新報」第五一九九号
第十二回琉歌大会

青島陥落を祝て 当座 点者伊江朝眞

365 青島も落ち今日からの先やさはくあた波も静かなよら
天 伊江朝英

366 恨みある敵のとりてせめ落ちすきし我か御主も嬉しや召ら
地 知念績昌

367 あたの白旗や青島になひち海も波しつかなたる嬉しや
人 兼嶋景福

368 仁 諸見里朝奇
待ちかねてをたる青島も落てかちときの音や四方にひひち
義 伊江朝薫

369 青島よとたるかちときの声にはた年の恨みはれていちゆさ
礼 大山朝眞

370 青島のできも安安と落ち光輝かす美代の嬉しや
智 稻福全名

371 固めたる皆せめ落す今日や四方にとろちゆら大和魂
信 松島朝京

372 勝軍しちやる今日の喜やいちもつくされめ上も下も
秀 伊江朝英

373 むかし唐土とたたかひの時の身にあまる恨み今日やそそち
佳 伊江朝薫

374 □青島のとりて攻落ちはた年の恨みそそく嬉しや
点者伊江朝眞

375 皆せめ落ち日の御旗たてて万世の声や空にひひき
点者伊江朝眞

376 二昔先の恥そそき今日や歌うたて遊ふ上も下も
大正三年一月一日付「沖海」第二〇九〇号
第十二回琉歌大会
兼題 点者伊江朝眞
隔年恋 兼題 点者伊江朝眞
天 糸満朝庸

377 年よひさめたるよしやしら露にぬれて恨みゆらはなのほらへ
地 與那原良儀

378 暫してやりいちと振別もしやすか年やひさめてもあてもないら

379 ん 糸満朝義
たとへふやかれて年やひさめても契ることの葉のいつも朽め
仁 松島朝京

380 年やひたててもゑんのひたてよめ二人か玉の緒の朽もかきり
義 知念棚敦

381 里とわか中や星合のことに稀に振合する縁かやゆら
礼 安森盛秀

382 渡海もひさめらぬ地つるきの島に年よ隔とて我きもやかす
智 稻福全名

383 指よ折りかへちまちなねる年の立かはるまでもあてもないらん
信 松島朝福

384 いな年も□て二人か小車のめくて振合しゆる節になたさ
秀 龜山朝奉

385 たるにかたられかとし月につむる衾れさまさまの胸の思ひ
秀 名護朝直

386 忘れ貝とまいて忘てかいまいら年よひさめてもあてもないらん
佳 名護朝直

387 年よひさめても音信もないらんつらさ身や秋の扇子なため
佳 高洲昌壯

388 年や隔ても思ひひたてよめ深く染なちやる二人か中の
点者伊江朝眞

389 わかまたぬ年やめくてつきをすかりか音信やあてもないらん
大正三年一月一六日付「新報」第五二〇二号
第十二回琉歌大会

隔年恋 兼題

点者伊江朝眞

天

年よひさめたるよしやしら露にぬれて恨みゆら花のわらへ

地

糸満朝庸
與那原良儀

暫してやりいちと振別もしやすか年やひさめてもあてもないら

ん

人

糸満朝義

たとへふやかれて年やひさめても契ることの葉のいつむ朽ぬ

仁

松島朝京

年やひたてもえんのひたてよめ二人か玉緒の朽ぬかきり

義

知念棚敦

里とわか中や星合のことに稀に振合る縁かやゆら

礼

安森盛秀

渡海もひさめらぬ地つるきの嶋に年よ隔として我きもやかす

智

稻福全名

指よ折かへちまつかねる年の立かはる迄もあてもないらん

信

松島朝福

いな年も明て二人か小車のめくって振合しゆる節になたさ

天

点者伊江朝眞

わかまたぬ年やめくてつきをすかりか音信やあてもないらん

大正三年一月一七日付「新報」第五二〇三号

第十二回琉歌大会

初冬 兼題

点者伊江朝眞

天

稻福全名

月と紅葉にうかれたる秋もいな過て冬の時雨ふゆさ

地

高江洲昌壯

千鳥なく声のしけくきかりゆす波のはな咲る冬になため

人

浦添朝長

紅葉狩しゆたる秋もいなくて時雨さきたてて冬や着め

仁

山城宗得

にしき織なちやる紅葉もちりて霜の花むすふ冬になため

義

山城宗蔭

月にうかれたる秋も行暮れて雪に歌よみゆる冬になたさ

礼

賀數朝睦

宵の間に冬や立かはてさらめ暁の空に時雨ふゆす

智

兼島景福

秋になかめたる紅葉もちりて霜にはな咲る冬になたさ

信

名護朝直

節も立かはて小春なてをすが鶯や啼ぬ霜とふゆる

天

点者伊江朝眞

秋やくれはてて行衛しら露の結てはつ霜の庭におきやさ

大正四年五月一九日付「新報」第五三七九号

第十三回琉歌大会

蚕

点者伊江朝眞

天

具志川朝及

かひこそたてよる業につなかれて花見しちあそふひまもないら

ん

地

名護朝直

与所の繭よりも色清さあすかいきやし素立たか蚕屋のわらへ

人

大山朝眞

410 嬉しさやことしいつよりも増てくりあける繭の糸の美さ
仁 仲濱政模

411 毛筋よりくまく虫の吐くいとの国とます程の宝なゆさ
義 與那原良儀

412 宿の藪山や桑畑になしやひかひこあかなゆす富のもとひ
礼 翁長良才

413 進む世とつれてわか沖繩島も蚕やしないのひろくなとさ
智 龜山朝奉

414 虫とてやりいゆすか繭籠しちゆてひきゆるしらいとや国の宝
信 嵩原安光

415 我か沖繩島も虫口糸ひかす業やなほひろくさかていかな
秀 高安朝常

416 夜も昼なちゆて素たてたるむしのひきあかるまゆの糸の美さ
秀 仲濱政模

417 明日あさてからや糸吐りたいもの肝いそぎえひらつくれおとち
や

418 世の中に蚕糸はかぬあれはいきやし暮しゆたか雪のさむ夜
佳 森田孟徳

419 庭出てくはの若葉つみわらへまちなかぬるかひこすててをもの
佳 高安朝常

420 虫もいとひちゆて国のためなゆひたた遊てくらち人のなゆめ
点者伊江朝眞

大正四年一〇月二一日付「新報」第五五三〇号

日曜会

兼題第十四回

菊 兼題第十四回

点者伊江朝眞

421 つみとたる菊のはなのしら露にぬれるわか袖も千代のにほひ
天 高安朝常

422 百草の花の根にかへるせつにほこてさき出たる菊の美さ
地 高安朝常

423 御祝日に向てやかて咲き出ゆら嬉こと菊のはなの苔
人 長嶺宗恭

424 仰くわか君の御祝日ゆむかて千世の玉菊の咲きやる清さ
仁 知念棚敦

425 菊の下水の流汲む人やいつまでもぬのちや年も寄らぬ
義 糸満朝義

426 春の花よりもかわて色美さうれしこと菊の花のにしき
礼 山城正輔

427 谷の水上やきくのまさかりかなけれゆる水の匂ひのしほらしや
智 山城宗得

428 わかやとにいまうち品さたみめしやうれ色色の菊の盛りたいも
信 花城朝忠

429 秋のかなしさも忘れて朝夕さも菊と楽しとて百氣のひゆさ
秀 山城宗蔭

430 酌る酒までも千代のかけうつちうれしこと菊のむかてさきやさ
佳 山田有度

431 木草色かわる秋の野に菊の千世の色ふかく咲る美さ
佳 岳本岱嶺

432 うれしこと菊の花やさかつきに浮けてくみかはす匂のしほらし
佳 比嘉次郎

433. 春にうかりたる花よりも増るきくの下露に酔ひ延ら
点者伊江朝眞

大正四年一〇月二二日付「新報」第五五三二号

日曜会

恋夢 兼題（第十四回） 点者伊江朝眞

天 浦添朝鄰

434 ままなゆる節も近くなてさらめ夢に思里の御側よよす

地 伊江朝薫

435 枕ならひやひ語る夜やいつか夢のふやはしやしけくあすか

人 名護朝直

436 夢の通路も露しげくふたみま torso 身か袖のぬれてをすか

仁 渡慶次朝宣

437 まとるめは又もをかまりかしゆよら夢にふやはちやる里かすか

た

義 翁長良才

438 若か思里に与所肝やないらね様様のことの夢にみゆす

礼 浦添朝長

439 年波やよても思ひ中川に夢の橋かけて渡て行ちゆさ

智 川平恵許

440 ままならぬしちゆて夢や夜夜ことに玉金御側よよらみしや

信 高江洲昌壯

441 夢に御行逢をかてあかぬ語らたすさめて物思みの種子となとさ

秀 知念棚敦

442 七重まし内にすまていまいる無蔵も夢の橋かけて夜夜にかて

秀 玉那覇常盛

443 かにもうれしき自由ならぬ無蔵と逢て語らたす夢ややても

佳 伊江朝英

444 さめて今迄も忘ららぬものや夢に振合ちやる花のわらへ

佳 美里朝珍

445 振別れて後の夜半のつれなさやまとるめは無蔵か夢の見ゆす

点者伊江朝眞

446 思みつくす故かおくじから里か運氣はらさんて夢にむちやさ

大正四年一〇月二六日付「新報」第五五三五号

日曜会

十月十七日

寄稻祝 当座第十四回 点者伊江朝眞

天 稻福全名

447 ことし御祝日やしのかしち遊は稲もあん美さよかてをもの

地 名護朝直

448 見は嬉しさやこかねなみたてたから田の稲のなひく清さ

人 浦添朝宣

449 いつよりもことし稲穂打ちたりてあふしした草□苺もならぬ

仁 高安朝常

450 さかていく美代の御めくみの露に千町田の稲のほなみ美さ

義 稻福全名

451 鳴子ひきなきな世果報ふし歌てことしまんさくの御祝しらね

礼 仲濱政模

452 耕の道のすすてさめことし去年よりも増て稲のよかて

智 眞壁朝可

453 君か万代の御祝日に向てゆかる稲の穂もあふしまくら

信 名護朝直

- 454 美代の御光にさかる民草やうす風になひく稻のこころ
秀 屋嘉比政兄
- 455 御代の御ひかりにあん清さゆかて小山田の稻のあふし枕
秀 森田孟徳
- 456 嬉しさや今年御祝日に向て打なへく稻の盛り清さ
佳 仲濱政模
- 457 吹風もしつかむしも又つかぬ千町田の稻のふなみ美さ
佳 仲濱政模
- 458 今度卯の年も又よかふさらめ千町田のいねのあふし枕
点者伊江朝眞
- 459 御のりすて後のお祭の時にささけゆる稻の穂なみ清さ
点者伊江朝眞
- 460 雨露の恵ときたかぬ故に千町田の稻の垂穂美さ
点者伊江朝眞
- 大正五年五月四日付「新報」第五七一七号
第十五回日曜会大会
- 461 庭のかたつふり頼まらぬ角やふり立て誰に向ていちゆか
天 仲濱政模
- 462 蝸牛たいんすめて時来れば出て角ふゆる浮世やすか
地 佐久本孟教
- 463 住み馴し小屋にこと足りる虫の誰と争ゆか角よたてて
人 山城正輔
- 464 雨晴て竹に遊ぶかたつふりきやほと嬉しさかつのものへて
仁 上江洲由壽
義 稻福全名

- 465 かかる雨降りにかすかたつふりぬれてもち運ふなどの住家
礼 大宜味朝隆
- 466 のかす蝸牛朝夕さもわ身の伽にしゆる花にすかて呉ゆか
智 浦添朝長
- 467 住家おひなからあゆむかたつふり牛よりもまさる力さらめ
信 糸満朝義
- 468 きやほふ嬉しさか野辺の蝸牛待兼し雨のふたる今宵
- 大正五年五月五日付「新報」第五七一八号
第十五回日曜会大会
- 469 蝸牛 兼題 点者伊江朝眞
秀 高江洲昌莊
- 470 のかす蝸牛いつもあまこまにいほりもちはこておてもつかぬ
秀 高安朝常
- 471 のかす蝸牛ののよしのあとて住家はなれ口ぬ一人くらち
佳 濱川順達
- 472 庭のかたつふり自満ふりするななどゆかくさみる角やあらぬ
佳 長嶺宗恭
- 473 あまた敵をすやしらね蝸牛やくたたぬ角も自満しゆすか
点者伊江朝眞
- 474 春雨のふれは庭のかたつふり角ゆふり立て遊ぶしほらしや
東風平安信
- 大正五年五月六日付「新報」第五七一九号
第十五回日曜会大会

寄竹恋 兼題

点者伊江朝眞

天

浦添朝長

千代かけて互に呉竹のことにいつもおきふしや共にしやひら

地

山城正輔

竹の節々に仕情は込てかわるなやう互に幾世までも

人

高安朝常

纏れたる纏れいつもかわるなやう庭に生たちゆる矢竹こころ

仁

大宜味朝隆

心ひかれゆさならず四竹の音にうちやかゆる花のわらへ

義

賀数朝睦

結である縁やかわるなやう竹の焦りてもふしやあるよたいもの

礼

翁長良才

窓の竹の葉に音信る風や待兼る里かいまひらとめて

智

諸見里朝奇

月にもら雲のかかるよりつらさ無蔵かかほかくす竹のすたれ

信

吉里眞仁

花の身よやても肝と縁さらめ竹のこと心直く持たな

伊江朝眞

雨ふてのあとの竹の子のことに禁止てきちららぬ萌る思ひ

東風平安信

いつもかわるなやう竹のこと直く仕情や互いにふしにこめら

大正五年五月八日付「新報」第五七二一号

日曜会 第十五回大会

残春 当座

互選

天 山城宗得

485

咲く花の蔭に朝夕くらしゆたるあたらこの春もすきていちゆさ

地

稲福全名

花も根に帰り鳥も巢に帰り藤と山吹に春や残て

人

比嘉春株

こころうきやかゆる花盛り春も暮て夏近くなたる惜しさ

仁

伊江朝眞

天と地のめぐりいきやしとめられかくれていく春やをしさあて

も

義

高安朝常

うくひすやふるす花や根にかへてのとかなる春のくれるをしさ

礼

當銘朝穎

あたら春やすか引もとめららぬさひしさや日々にくれて行さ

智

大宜味朝隆

朝夕なかめたる花もちりはてて残る山吹と伽にしやびる

信

大山朝眞

名残り立ましゆさあたらこのはるもにやまた夢の間に暮て行は

大正五年一〇月二日付「新報」第五八七四号

第十六回琉歌大会 十月八日

秘恋

点者伊江朝眞

天

龜山朝奉

おみつめてをすか若しか夢うちに思事の寝言すらはきやしゆか

地

高安朝常

たかいに山吹のいわぬいろそめれ結ひかためたる糸の御縁

人

久高唯澤

身にあまる思ひむね内につつてかたうてやいすれば浮名たちゆ

495

494

493

492

491

490

489

488

487

486

い

仁

浦添西峰

壁も耳たいもの口なしのことにいはぬ色深く肝に染れ

義

浦添西峰

かほ見も与所のうさんしゆらたいものおまぬふりすれやう花の

童

礼

名嘉地憲敷

童あてなしとかくれことしちよていはぬてといふすか肝にかか

て

智

勢理客宗宣

谷間かくれたる岩つつしこころ露ほども与所の□らぬことに

信

喜舎場清謙

思ひかきくめて文やかよはちも与所に語られぬ二人かちきり

秀

渡久山朝是

おしつくみつくみむねうちに包て思ひかほ与所に見せて呉るな

秀

山城宗得

一期いつまでもむねうちにつつて与所にもらすなよ二人か契り

佳

岳本岱嶺

たかひに思事や胸うちにつつていことはに出ち浮名たとな

佳

山里永昌

むすふいとゑんや与所しちち呉るな二人か玉の緒にかかてをも

の

点者伊江朝眞

もしかもの思みのいろにあらはれて与所の疑のあらわちやしゆ

か

大正五年一〇月一三日付「新報」第五八七六号

日曜会第十六回大会

大正五年十月八日

秋興

天

点者伊江朝眞

紅葉鷹狩り暮る日も忘て遊て面白さ秋の野山

地

翁長良才

月あかるまでも鷹狩ゆしちゆて遊ておもしろさ秋の林

人

龜山朝奉

袖やぬれらわん手折しちむたな露かみて咲る萩の一枝

仁

賀數朝睦

小車ゆとめてあかぬ詠みゆさ初霜に染たる峯のみち

義

稻福全名

紅葉かりしちゆてなまと戻たすか又も照る月の我肝ひきゆさ

礼

稻福全名

薄葉のまねく野辺出てみれば花もまち顔に笑てさちやさ

智

名護朝直

稲もかりあけてたのみありあきの月にうたうたて遊ふ嬉しや

信

山城正常

山里の紅葉ちり飛ぬうちにまたも詠めらな友へよらて

秀

高安朝常

秋や色色のあそひいちゆなしやのひるやもみちかり夜や月見

佳

當銘朝顯

野辺に鷹はなち狩りの楽しみや秋の淋しちもよ所になしゆさ

佳

喜舎場清謙

紅葉はの錦野山うちつつちあかぬ詠みゆさ秋の景色

佳

長嶺宗恭

517

もみち葉の上に月も照てり清さ遊て面白後の今宵

点者伊江朝眞

518

空もすみ渡て風も又しつか小鷹とて今日も遊びほれて

大正五年一〇月一五日付「新報」第五八七八号

第十六回日曜大会 十月八日

夢 当座

点者伊江朝眞

天

山城宗蔭

519

うつり行先の浮世有様のかねて見られゆる夢のあらな

地

森田孟徳

520

真心ゆ開き語てねる夜や夢も嬉しこと見せて呉ゆさ

人

浦添西峯

521

千里と行駒もいちやしおよりはるか夢路から行るわ身のおもひ

仁

佐久本孟教

522

あたら夢やすか見果てらぬ内に吹ゆうつまちやめ夜半の嵐

義

花城朝忠

523

蝶る身になやいはな吸ゆる夢の見はてらぬうちに覚るをしさ

礼

佐久本孟教

524

つくつくと思は浮世慣しやしはしうたたねの夢のここち

智

山城宗得

525

ねれはわすれゆるひまもあらとめはなさけないぬ夢のおこすつ

らさ

信

佐久本孟教

526

浮世与所なしゆる老の身にのゆていらぬことまでも夢に見ゆか

秀

稻福全名

527

思ひねの夢としりなきな我身や忘て忘れらぬ肝にかかて

528

秀

おみつかてをたら夢や夜夜毎に見ちよていたつらにわきも焼す

529

朝夕さものはなのかけに宿かやい匂そゆる夢のさめるをしさ

大正六年五月一七日付「新報」第六〇八三号

日曜会第十七回琉歌大会 大正六年五月十三日

初恋 兼題

天

点者伊江朝眞

530

年ころやなても肝やなまわらへ恋の初草やいきやしつのか

地

伊江朝薫

531

おみやもてをたる恋の初旅もなたやすく今宵渡てむちやさ

人

大山朝眞

532

袖しほる涙や胸にもひそめる恋の若草の露やあらね

仁

比嘉春株

533

きやほと嬉□□かけふのよかる日に千世かけて結ふ縁のはしめ

義

龜山朝奉

534

思ひつて渡る恋の初旅に若か波風のたたはきやしゆか

礼

伊江朝英

535

御側寄り初るけふのわか肝や嬉しさと世話となかはさらめ

智

岳本岱嶺

536

思ひつくさらぬこのあわれとめは恋の若草やつまぬたすか

信

仲尾次盛孝

537

のことも思まぬわらへあてなしの恋の初草やいきやしつぬか

秀

比嘉春株

538

いつも忘れゆめ恋の初旅に手とて引呉たる人の情け

山城正輔

- 539 秀 山城正常
やはやはとふたる宵の間の雨に根さし初めたる恋のやわた
- 540 佳 名護朝直
春ゆしり初て通ひはしめゆさこころうかれゆる花の木かけ
- 541 佳 稻福全名
嬉しさや今宵咲かちなかみたまたさ朝夕まちなかぬる花のつほめ
- 542 点者伊江朝眞
なまわらへとめは恋の若草の胸に萌そめる春になため
- 大正六年五月一九日付「新報」第六〇八五号
日曜会第十七回琉歌大会 大正六年五月十三日
- 煙草 兼題 点者伊江朝眞
543 天 伊江朝眞
みそとみて起て埋火ゆ起ちそゆる白梅の匂のしほらしや
- 地 浦添朝長
544 人 浦添朝宣
ふきかへしかへし敷島やふきも敷島の道やさとりくりしや
- 八千代巻こめる□こころやししみゆさ朝も夕さも
545 仁 兼島景福
ゑの多葉粉やすか替て匂しほらしやお掛ほさへ御主の美代の八
- 千代 義 名護朝直
547 礼 當銘朝顯
世話も忘れゆさ吸るしら梅のしほらし匂立るくたのけふり
- 548 智 當銘朝顯
夜明まちなかぬる老の身のこころ慰めるものやたはこさらめ

- 549 信 浦添朝宣
夜明しらしらと埋火ゆおこち煙草ふくこちいちもいやらぬ
- 550 秀 徳永盛根
一人有明の月に打向てきりための蓂ふきゆつくち
- 551 秀 山田有度
花の匂うつち□たちあるたはこ吹かかしかかし伽になゆさ
- 552 佳 具志頭朝香
肝のふさかりも吞ははきいきゆさ友の旅からのみやけたはこ
- 553 佳 仲尾次盛孝
世話やふきすてて喜やそへて朝夕伽なゆるくたの煙り
- 554 点者伊江朝眞
苦しやふちすてて嬉しやしち朝夕こころ慰みる刻み多葉粉
- 555 点者伊江朝眞
てはふさぬことに朝夕吸めしよれ思ひ巻こめる葉まき煙草
- 大正六年五月二二日付「新報」第六〇八八号
日曜会第十七回大会 大正六年五月十三日
- 春田 当座 点者伊江朝眞
556 仁 佐久本孟教
見るもうれしさや小山田苗代久葉のいろふくてなたる美さ
- 557 義 佐久本孟教
御めくみの露に小山田の苗代若葉差し揃てなたる美さ
- 558 礼 大山朝眞
雨も時たかぬ水もせきあまち苗代種子おろす春の山田
- 559 信 兼嶋景福
なしろ田もくなちふたる春雨にいりかかぬ水や御代のめくみ

560 よかる日ゆ扱て種子まちやる小田にやははと雨のふるか嬉し
や

秀

當銘朝顛

561 てちややう苗代田に水こめら弟ちややかて種子蒔の日取りたい
もの

佳

具志頭朝香

562 あら田打かへち蒔きやる苗代田に青葉もひいつるいろの美さ

点者伊江朝眞

563 汗の玉水もなちすきかへち蒔ちやる苗代やよかるためし

大正六年一〇月一六日付「新報」第六三三二号

第十八回日曜会琉歌大会

寄河恋 兼題

伊江朝眞大人撰

天

賀數朝睦

564 誰ために童へ花の袖かへち走河におりて布よさらす

地

具志頭朝香

565 思ひ自由ならぬ二人か中川もゆめのうき橋や夜夜にかけて

人

高江洲昌壯

566 河や隔ても星逢のことにかわるなやう契り幾世までも

仁

松島朝京

567 哀れわか恋や河の浮草か浪のよるひるもうてもつかぬ

義

稻福全名

568 なさけあてからや天の川たいんす紅葉舟うきて渡していちゆさ

礼

吉里眞仁

569 走河のことにとめららぬものや胸に湧出ゆる恋のおもひ

智

伊江朝英

570 いきやかなて行ゆら二人か中川や浮名立つ波もしけく立ひ

信

大宜見朝隆

571 河の水たいんす絶える間もあすかたゆるまやないさめ糸のこ縁

秀

與那原良儀

572 夢や夜夜ことに枕ならひてもさめて自由ならぬ河の渡り

秀

具志頭朝香

573 川やひさめても志情のはしやかけてかよはしゆる節と待る

佳

花城朝忠

574 天の星たいんす川わたりみしようちおもひかたらゆる節もあす

か

佳

松島朝京

575 思ひ身にあまて哀れつつまらぬわき出る涙や河となゆら

追吟

点者

576 時雨ふりつめる空に川さきの魚まちゆることにまつ苦しや

大正六年一〇月一九日付「新報」第六三三四号

日曜会第十八回琉歌大会 大正六年十月十四日

飛行機 兼題

伊江朝眞大人撰

天

渡慶次朝宣

577 人のなち成らぬものやないぬさらめそらにとて行ゆるたくみ見

れは

地

長嶺宗恭

578 空にとふとりの翅よりまさて雲の波わたる人のたくみ

人

伊集治令

579 神代にも聞ぬそらに飛渡たる鳥よりもまさる人のたくみ

仁

具志頭朝香

580 そらに飛はしるうつはのてあたのとりにて窺かゆるたくみしちひ

す

義 與那原良儀

581 空に飛渡るうつは見ちしゆさ進む世の中の人のたくみ

礼 大見朝隆

582 鳥よりもまさるうつは乗て空も自由に渡られる美代になたさ

智 長嶺宗恭

583 空に飛わたて敵ようかかゆさ進む世の中の人のたくみ

信 糸満朝美

584 すすむ世の中のはてや白雲に飛わたるきかひ見ちとしゆる

秀 佐久本孟教

585 すすむ世の中やかにもめつらしやめ空たかくとはす人のたくみ

秀 大山朝眞

586 見ちも珍しや鳥のこと空に飛あかていちゆる人の巧

佳 比嘉春株

587 空に飛まはててきようかかゆす進む世の中の人のたくみ

佳 高江洲昌壯

588 空にとひあかて自由にゆきかへるうつは初めたる人や誰か

追吟 点者

589 空にとぶ器うみ山もこへて自由にうかかゆさ敵のとりに

大正六年一〇月二五日付「新報」第六三四〇号

日曜会第十八回大会 大正六年十月十四日

独居 当座 伊江朝眞大人撰

仁 大山朝眞

590 与所めないともて独りをる時も慎まななゆめ誰になても

591 見る人もをらぬた一人ともて肝にとかみゆる事やするな

義 稻福全名

592 天と地やかかみつしまななゆみたとへ草宿に一人をても

礼 當銘朝顕

593 与所めないんともて我儘にするな天と地の鏡てらす浮世

智 稻福全名

594 たた一人をてもおかときぬことに慎まななゆめころたたす

信 翁長良才

595 ひとり居る我身のあさゆさの友や澄てなみたたぬ池の清水

秀 渡慶次朝宣

596 独りあればてる草宿にをてもきもやあり明の月のさやか

秀 渡慶次朝宣

597 楽もくるしみも与所とおみなちと柴の戸はしみて独りをゆる

佳 龜山朝奉

598 人の見たぬはしゆに一人住てをても心あさむちゆることゆなす

佳 翁長良才

599 与所しらぬともてころあさむくな天と地のかかみてらすため

追吟 点者

600 春の夢見ちやらうつき咲谷にやとる鶯のさわきなちゆす

大正七年五月三〇日付「新報」第六四四九号

日曜会第十九回大会 五月二十六日

谷残鶯 点者伊江朝眞

天 名護朝直

600 春の夢見ちやらうつき咲谷にやとる鶯のさわきなちゆす

601

地

驚や春の行衛たつねてと深山谷底にさわき鳴きゆら

浦添朝長

人

山城宗蔭

602

花も咲のこて驚も鳴い深山谷底や春のこち

仁

知念政和

603

ちきりしやる春の侘や今も残て驚の谷に鳴ちゆら

義

上江洲由善

604

谷の懐に鳴るうくひすや別れたる春のなこりたちゆら

礼

賀數朝睦

605

うくひすも春の面影の立ゆら青葉なるまでも谷に鳴ゆす

智

長濱宗恭

606

谷の卯花に鳴るうくひすやわかれたる春の夢と見ちやら

信

稻福全名

607

花も散りはてて深山谷底に残るうくひすと春の形見

秀

玉那覇常盛

608

のかす今までも驚の鳴る春や谷底に残てをたみ

佳

山城宗得

609

深山驚の声の聞れゆす谷底やなまて春かやゆら

点者伊江朝眞

610

谷のふところや今春やあらね残る驚の声のさやか

3 募集歌

大正二年一〇月三十一日付「沖毎」第一七二三号

天長節を祝ひ奉りて

正四位伊江朝眞

1 御代おつきめしやうちけふからの御祝園のまつ風の千世のしら

へ

岸本賀雅

2 年のよるほどによくと願やへる君が万代のけふの御祝

仲濱政摸

3 肝の雲霧もはれてけふからや御すて日の御祝するかうれしや

山城宗得

4 けふの御祝日になひく日のみはた千代八千代さかるかけのうつ

る

具志頭朝香

5 照るてたのことにあふく嬉しさや御掛ほさひ君かけふのお祝

高安朝常

6 み代つきゆめしやうち今日やわか君の御すて日の祝のはしめさ

らめ

渡慶次朝宣

7 君かおすて日やいく千年までも上下もそろて御祝□やひら

森田孟徳

8 御慈悲ある御主の御祝日のけふや千代の歌うたて遊ぶ嬉しや

大山朝眞

9 君かおすて日や九重のおにやに千代の白菊の咲る美さ

知念績昌

10 今日やわか御主の御すて日よたいもの万代に榮る御祝しやひら

眞壁朝可

11 日日の宮につなかれてをても君のおすて日やをとて遊は

長嶺朝興

12 けふや君か代のはじめての御祝八千代歌声やそらにひひく

糸満朝庸

13 御掛ほさひ願ていつも長月の月にうたうたて遊ぶ嬉しや

當銘朝頼

14 大君前千代のはつ美かけあふくけふのうれしさやいちもいやら

ぬ

比嘉賀徳

15 仰く我か君の御すて日のけふや御万人のまきり笑い誘い

稻嶺全名

16 おすて日の今日やうれしこときくの花も打笑て祝ひたこと

知念政置

17 御すて日のけふやかた田舎までもみはた立つつき遊ぶ嬉しや

長嶺宗恭

18 塵ひしのつもて山となるまでも御掛さほひ御代の御願しやひら

山城宗蔭

19 御臣下のまきり躍て遊はひら千代の御初の御祝たいもの

大正二年一月二日付「沖毎」第一七二四号

天長節を祝ひ奉りて

七十七翁岸本賀雅

20 おいか年波や只ななちあまり御かけほさひ御代や浜の真砂

渡慶次朝宣

21 年ことにけふやおかけほさひ願てお万人の間切祝ひあそは

佐久本孟教

22 御祝日のけふや御万人の間切酌みかはしかはし遊ふ嬉しや

知念績昌

23 御世次の御主の御すて日よたいもの御かけほさひ願て祝ひ遊は

比嘉賀徳

24 国の喪もはれて美代つきの御主の御すて日ゆ祝ふるけふの嬉し
や

知念政置

25 つきてらす御代の千よの御光や四方に清み渡てあふく嬉しや

具志頭朝重

26 御すて日の今日や上下も揃て君か万代の御願しやひら

大灣喜信

27 日ものちやかゆさ起て旗たてれ今日や我か君の御祝たいもの

富名腰昇英

28 起きれ孫なし子支度しち出れ今日や大君の御祝やれは

29 かにあるにぎやかや世界に稀さらめあふく天加那志千代の御祝

30 君の御祝や御臣下の間切そろて万さいの声のしほらしや

糸數昌福

31 夜明しらしらと日の御旗あけて御祝しち今日や遊ふうれしや

大宜見朝隆

32 うかけほさひ美代やあまた民草も御恵みの露にのれる嬉れしや
33 門ことに今日や日の御旗あけておかけほさひ美代の御祝しやへ
ら

高良睦輝

34 今日や天加那志初めてのの御祝千よの願しちゆて遊ふ嬉れしや

山城口縁

35 御掛ほさひめしやうれ帝天加那志幾千年迄も拜てすれら

36 御すて日の御祝千よ八千よ迄も打重ね重ね拜てすれら

大正三年一月一日付「新報」第四八九四号 琉歌

渡慶次朝宣

37 新玉のとしやうちわらひわらひほこり声ときちゆる上も下も
38 見る人やたるも嬉しかほはかりまこと新玉の年のしるし

濱川順吉

39 新玉の年や上下も揃てあをく我か君の千代の御願

40 御慈悲あるゆへと御万人のまきりころやすやすと年もとたる

仲濱政揆

41 うしと引かへて寅年もなたひお主がなし御祝やがてさらめ

42 新玉の年やしらぬ人までもたもとひき共に飲ゆか嬉しや

屋嘉部政呈

43 新玉の年ののとかなる御代や波の声もないらん風も静か

伊江朝薫

44 御代もあらたまてあける初年や嬉しことはかり聞かうれしや

玉那覇常盛

45 心浮かゆる年もいななたため君か世の歌や四方に響き

46 見る人やたるも喜びの目眉打開き語る年の初め

47 初春になりは梅もひもとけて笑て咲く花の香のしをらしや

48 波風も静みるく世のよがふうれし事つく年や今年

新垣隆俊

49 新玉の年や心ははれと君が世はうたて遊ふうれしや

大正三年一月一日付「沖毎」第一七八三号

初春海

七十八翁岸本賀雅

50 はつ春の海や浪路なたやすくのとかなる美代のしるしさらめ

仲濱政摸

51 きのふまで波のあらさたるうみのうす霞わたてしつかなたさ

渡慶次朝宣

52 浪間ぬちやかゆる月にうすかすみかかる海からとはるやたちゆる

當銘朝顛

53 かすかなて見ゆる沖の島々やいつのまに着か春のころも

大宜見朝隆

54 春の海原やささ波もたたぬ静かなて舟もはるか美さ

屋嘉比政呈

55 初春になれば海原の波ものとかなる花の咲くか清らさ

大正三年一月三日付「新報」第四八九五号 琉歌

大宜見朝隆

56 のとかなる美代や立てる門松にそよく風の音も千代のひひき

57 間も嬉しさや門松の下に遊ぶ子や孫の千代の口声

鉢嶺清温

58 めたかなるみ代の新玉の年やゆらてくむ屠蘇も千代の匂ひ

59 間くも嬉しさや初春の空に常磐なる松の千代の調べ

60 ゆらて酌む屠蘇に肝の門もひらき祝ひことほちゆる年の始め

新崎兆桂

61 新たまで天の御恵めや一期拜でしてやびら初の御しやく

新崎大興

62 新たまる美世や竹と松かざて弥勒世のよがふ御祝しやびら

眞喜志康始

63 年の立ち始ゆ門松に美旗屠蘇飾て君か千代の祝ひ

大正三年一月三日付「沖毎」第一七八四号

初春海

富名腰次郎

64 眺めてもあかぬ心晴晴と初春の海や浪もしつか

渡慶次朝宣

65 春やはるはると海路からたちゆらおきのしましまに霞かかて

七十八翁岸本賀雅

66 はつはるの海によよるとし波のよらぬすよ見れはももとまても

4 寄稿歌

大正元年九月五日付「沖毎」第一三一七号

諒闇

仲濱政模

1 よろつ代とあふくあまつ日のおみ子七重八重雲の立ゆかくち

大正元年九月八日付「沖毎」第一三二〇号

先帝を悼み奉りて

岸本賀雅

2 一期いつまでもをかまてやりしやすかてたや西山にかくれめし

やうち

大正元年九月一三日付「沖毎」第一三二五号

先帝陛下を奉悼し奉りて

仲濱政模

3 いつもかなしみゆる秋の空やすか、今日のよやかかわて露のしけさ

大正元年九月二〇日付「沖毎」第一三三一号 毎日藻壇

詩作(三十字詩)

おなじ人

4 闇の夜ややても無蔵が住む館忍でいくさきに白く光て

5 無蔵が黒髪を包む花染の手拭(てさじ) たが呉たが我肝やむさ

6 八千声なく鳥□夢さめて我身やしがと抱ちしめさ麻の蒲団

7 無蔵か六尺の黒髪を吹る初秋の風□匂ひのしほらしや

8 もてなしのおもさほればれと我身やいちまでもをらな無蔵が裏

座

9 千千の苦しきもうち忘れてからに唄ゆまひ遊ば無蔵と二人

10 しだくふく□□□れよる無蔵か唄や□□□の我肝なち

11 言葉ゆ忘れ仇男(あだしを)になびく無蔵が行くさきや闇夜さ

らめ

12 あげやう吾恋や新造(しんはじ)の船の初旅□ことさ心あまち

13 無蔵といちぶさや極楽のみ□蓮の花咲る玉の台

大正元年九月二一日付「沖毎」第一三三二号

先帝陛下を悼み奉りて

鉢嶺清温

14 お日や雨雲にお隠れよめしよち四方の民草の露の繁さ

大正元年九月二六日付「沖毎」第一三三六号

乃木大将夫妻の殉死を悼みて

仲濱政模

15 後生までもきみの御共からみちやるとしめとかほまれいつ□朽

ゆめ

大正元年一〇月八日付「沖毎」第一三四八号

諒闇

屋嘉比政兄

16 桃山の行幸みちみちの草□露や御万人のなみたさらめ

糸満朝庸

17 をかてなつかしや御慈悲ある君の美代の御栄もすていまいす

18 数多御万人のこころつくすはもおよしみもならぬ□日のみゆき

糸満朝義

19 かむあかりめ□やうち世界や物音もたへて明け暮も袖よぬらち

高安朝常

20 いく千とせ迄もおかけほさへめしやひる御万人の願もあたにな

ため

伊江朝薫

- 21 御引とめならぬ行幸さめとめは御万人のまきり袖よぬらち
諸見里朝奇
- 22 あをくわか君や雲かくれみしやうち御万人のまきり袖よぬらち
大山朝眞
- 23 朝夕御万人も袖とぬらしやひる此の代ふりすてて行幸み□やす
あをく我か君や雲かくれみしやうち朝夕御万人や袖とぬらす
浦添朝長
- 24 天照らすおてた雲かくれみしやうち御万人の心闇のここと
岸本賀雅
- 25 なからへてをてものしゆかわか君やまたと拜まらぬ行幸めしや
うち
松嶋朝京
- 26 あたら天かなし桃山の行幸御引とめららぬ袖とぬらす
知念政置
- 27 神あかりめしやうち空尋てもみかけさへをかむ方もないらぬ
勝連貞
- 28 雲の御かくれに世界やとなど物音もたえて袖とぬらす
山里守祥
- 29 仰くわか御主や神あかりみしやうちいきやし暮しゆら上も下も
山里守祥
- 30 ふたつ無ぬ御日雲かくれみしやうち衾れ上下も袖とぬらす
山城宗得
- 31 千代八千代かけて御願しやる御□も衾れ雲の上にかくれめしや
うち
佐久本孟教
- 32 御恵の露や御万人の頭にかみていく千代の御願しやすか
- 33

- 34 都から田舎物音もたえて笑ひ顔しちゆる人やをらぬ
稻福全名
渡慶次朝宣
- 35 神さりし君の御名残にかかる四方の民草の露のしけさ
たとへ桃山に御かくれになても世世に御万人やあをき拝む
具志頭朝香
- 36 天か那志雲におかくれよみしやうち民のかなしみや限りないさ
め
野崎真秀
- 37 拝てなつかしや神上よみしやうち朝夕さも袖に露とうきゆる
森田猛徳
- 38 御慈悲ある君や此世捨て召しやうちなけき悲まぬ人やないさめ
大正元年一〇月二九日付「沖毎」第一三六八号
島袋回山
- 39 那覇区展覧会を觀て
花よりも優て香やこの御座の隅□隅までも立るしほらしや
大正元年一月一五日付「沖毎」第一三八五号
奥嶋憲主ぬしの訃に接して
渡久山朝是
- 40 かにもかなしさめうちよらいよらいかたらたる友も此世すてて
山城正常
- 41 真肝うち合ちかたることの葉の匂も今のかぬむかしなるい
金城秀長
- 42 肝のゆるしみも今からとされすなつかしや草のかけにいまふち
勢理客宗宣
- 43

44 戻らぬ旅にいないまひとめはよらていはなしもしゆたらや
すか

久志安均

45 六十六としも夢の間とやすかあたらしか此世わかつていまふち

安森盛秀

46 草の蔭たのていまひる長旅やなつかしやにおてる露のしけしや

新崎盛相

47 よらて命のへる友のいはなしもすてて先いまふちやめ蓮の台

大正元年一月二七日付「沖毎」第一三九六号

久茂地の菊花品評会を見て二首

浦添朝長

48 素立たる人の心あらはれてあん清らく咲きやる菊の姿

49 金から銀錦うちましり鉢数に咲きやる菊の美さ

大正元年二月二八日付「沖毎」第一四二七号

娼妓どもの帽子をあむを見て

遊治郎

50 尾瀬小たかそろて帽子くむし見れば物と思はしゆる辻の裏座

大正二年八月四日付「沖毎」第一六三八号

友竹亭新崎盛相ぬしの詠に接して

渡久山朝是

51 朝夕さも共に語らゆる友のつれなさや長き別りなたす

山城正常

52 きのお晩までもあかぬ語らたすまたと拝まらぬ別れやたら

金城秀長

53 あたら世に別て極楽よともて蓮葉の花に安座しちやめ

勢理客宗宣

54 よしまらぬいまひる死出の旅立やなかく草の葉の露のしけしや
久志安均

55 きのお語らたるうれしいはなしも此世別路のいと□やため

高良睦順

56 冥途の旅立やよしてよしまらぬ思めたたぬいまひる蓮の台

山城正輔

57 きのおけふまでもよらて語らたすむかしことなため夢の浮世

大正二年八月三一日付「沖毎」第一六六五号

九年母をよみて

百名朝起

58 九つのとしに母となてをすか子の父親や誰るかやゆら

返しとて

59 御恥かしやあてもいやなまたなゆめ子の父親や雨と露と

大正二年九月一五日付「新報」第四七九〇号 ○琉歌

中秋観月

貯月生

60 詠ゆる人の肝やにやはるはる名に立る今日の月やひとつ

61 名に立る今宵名残いやましゆさなれしふる里の月とやすか

62 年ごとに照す月影とやすか詠てもあかぬ秋のこよひ

大正二年九月二四日付「新報」第四七九九号

故東恩納盛賢君を悼みて

伊江朝眞

63 首里のためつくち朝夕はたらちやるいさをしやあとにあかるた

めし

渡慶次朝宣

64 草葉ふみわけて手向しゆる袖にあたし野の露のかかるしけさ

高安朝常

65 かねもさしひさめ年やとしことに月花の友のひなていけは

金武朝宣

66 世話もよろこひもともにしやる友やあはれ苔下の人となため

屋嘉比政兄

67 あたら月花もともになかみらぬわかつてさきなたる人とあはれ

大山朝眞

68 あたら玉の緒も無情の山嵐に吹よちらされる人のあはれ

大正二年九月二十六日付「新報」第四八〇〇号

故東恩納盛贊君を悼みて

名護朝直

69 みとり子の御祝なまむちゆとなゆすまれの年見たぬあの世まふ
ちやめ

名嘉地憲敷

70 ともに詠めたる月花の友も苔の下かけの人となため

知念政置

71 新西吹つめて百草と共にちりはててむちやる君とあはれ

大宜見朝隆

72 いちやし忘れか月花のかけに朝夕語らたる人のなさけ

大正二年九月二十六日付「沖毎」第一六八九号

故東恩納盛贊君を悼て

伊江朝眞

73 首里のためつくち朝夕はたらちやるいさをしやあとにあかるた
めし

渡慶次朝宣

74 草葉ふみわけて手向しゆる袖にあたし野の露のかかるしけさ

高安朝常

75 かねもさしひさめ年やとしことに月花の友のひなていけは

金武正宣

76 世話もよろこひもともにしやる友やあはれ苔下の人となため

屋嘉比政兄

77 あたら月花もともになかみらぬわかつてさきなたる人とあはれ

大山朝眞

78 あたら玉の緒も無情の山嵐に吹よちらされる人とあはれ

大正二年一〇月九日付「沖毎」第一七〇二号

「文苑」

名護朝直

79 みとり子の御祝なまむちゆとなゆすまれの年見たぬあの世まふ
ちやめ

名嘉地憲敷

80 ともに詠めたる月花の友も苔の下かけの人となため

知念政置

81 新西吹つめて百草と共にちりはててむちやる君とあはれ

大宜見朝隆

82 いちやし忘れか月花のかけに朝夕語らたる人のなさけ

大正二年一〇月九日付「沖毎」第一七〇二号

「文苑」

愛菊子

83 そたてし菊のつほみを見て
そたてたる主のこころ思みわかち美しく咲き出れやう菊のつほみ

大正二年一〇月三十一日付「新報」第四八三四号

知念政置

84 つきてらす御代の千世の御光や四方口清み渡であふく嬉しや
御すて日のけふやかた田舎までもみはた立つつき遊ぶ嬉しや

奉祝天長節

85

- 86 塵ひしのつもて山となるまでも御掛ほさえ御代の御願しやひら
長嶺宗恭
具志頭朝香
- 87 照るてたのことにあふく嬉しさや御掛ほさえ君かけふのお祝
屋嘉比政兄
- 88 いつもこの御代になからひてをとてけふの御祝ひ日や遊ひほし
やの
- 89 年や寄てをてもけふの御祝日にるちのをられよめをとてあすは
稲福全名
- 90 おすて日の今日やうれしことぎくの花も打笑て祝ひたこと
具志頭朝重
- 91 おすて日の今日や上下も揃て君か万代の御願しやひら
名護朝直
- 92 御すて日のけふや空もすみ渡て千代八千代うたてあそふ嬉しや
高安朝常
- 93 み代つきゆめしやうち今日や我君のおすて日の祝のはしめさら
め
渡慶次朝宣
- 94 年ことにけふやおかけふさひ願てお万人の間切祝ひあそは
きみのおそて日やいく千年までも上下もそろて御祝しやひら
森田孟徳
- 96 御慈悲ある御主の御祝日のけふや千代の歌うたて遊ふ嬉しや
佐久本孟教
- 97 御祝日の今日や御万人の間切酌かはしかはし遊ふ嬉しや
大山朝眞
- 98 君かおすて日や九重のおにやに千代の白菊の咲口美さ

- 99 御世次の御主のおすて日よたいものおかけふさ願て祝ひ遊は
今日や我御主のおすて日よたいもの万代に榮る御願しらべら
知念續昌
糸満昌福
- 100 夜明しらしらと日の御旗あけて御祝しち今日や遊ふうれしや
柳葉
- 101 君の御隆や国さかるためし御祝しち遊はけふのみ空
山城宗蔭
- 102 御臣下のまぢり躍て遊はひら千代の御初の御祝たいもの
大正二年一月六日付「沖毎」第一七二八号
仲濱政模
- 103 前日の潤雨を
大正二年一月六日付「新報」第四八四九号
男爵伊江朝眞
- 104 原のもつくりもきや程うれしさか九月からふらぬ雨もふたい
故林世功追悼詩歌(一)
故林世功追悼詩歌(四)
君国のためにあたらしかいのちふりすてし人や世世の手本
仲濱政模
- 105 大正二年一月一九日付「新報」第四八五二号
湧川朝升
- 106 故林世功追悼詩歌(四)
百歳よりまさて極楽の道に義理枕しやすや世世の手本
高江洲昌壯
- 107 玉やくたけても光ある浮世いつも名の朽ゆめ君か操
- 108

大正二年一月二〇日付「沖毎」第一七四二号

故林世功追悼詩文集

屋嘉比政兄

109 いつし名のくちゆか国の為つくちいのちささけたる君かまこと

比嘉賀徳

110 国のためしちやる君か身やくちもいきやし名の朽ゆか幾代までも

仲濱政模

111 君国のためにあたらしかいのちふりすてし人や世世の手本

大正二年一月二一日付「沖毎」第一七四三号

久茂地の菊合を見て

仲濱政模

112 けふやうれしさら大納言様のあまた人々に□見目されて

大正二年一月二五日付「沖毎」第一七四六号

故林世功三十三年祭追悼之詩文集

比嘉賀徳

113 いなむかしなるひ国のため君かあたら身ゆすてあゝの世いもちや

す

大宜見朝隆

114 いつも名の朽め君国の為に命ささけたる人のみさを

大正二年一月三〇日付「新報」第四八六二号

見菊花品評会

川平恵許

115 素立たる人の肝までも千代の匂たてて咲ちやる菊の清さ

116 いろいろの菊の色香あらそへて咲き出たる花や千代の姿

大正二年一月二日付「新報」第四八六四号

品評会の菊を

仲濱政模

117 素立たる人の名も高くあけてうれしやけさ咲をる菊の姿

118 明年の秋からやよくも数増て世□もしら菊の花も咲ゆら

119 わか宿の菊も会に出ちやちやすか色香□いぬあたら番もつかぬ

大正三年一月三日付「沖毎」第一七八四号

新年祝

鉢嶺清温

120 浪風も立ぬ新玉の年やあまたお万人の歌声はかり

121 ゆたかなる御代の新玉の年やゆらて酌む屠蘇も千代の匂ひ

122 ゆらて酌む屠蘇に肝の門もひらき祝ひことほぎゆる年の始め

大正三年五月九日付「沖毎」第一九〇五号

某赤毛布の東京観

何かの事故ではしめて上京せる某赤毛布は本社の一記者宛左の琉

歌を寄せ来れり

123 田舎山原が那覇登りよりもかはて珍らしや江戸の都

大正三年六月二六日付「沖毎」第一九五三号

歌三味線の友與儀宅盛身まかりけるに 仲濱政模

124 今日や茶屋はへいら明日や十七八うたて遊ゆたすゆめのことち

125 なま迄も耳にきかれゆることち伊野波のいしくひりうたる声の

大正三年一月四日付「沖毎」第二〇七九号 「湯原時報所載」

仲濱政模

リボン

126 わらんちやか髪に結であるリボン花しのでとひゆるはへるともて

体操

127 声と諸共に手足うこかすはからたすこやかにゆんさらめ

遊戯

128 歌になぞらへて目付から手ふり足ふみもかはちをとるわらへ

小春

129 吹風もしつか驚んふける誠名のこと小春さらめ

菊

130 詠めてもあかぬ君かことふきのはてやしら菊の花のきよらさ

綱引

131 負るなよわらへこのたんめまでも綱の尾にかかてひかんしゆもの

運動会

132 学ひ屋の人の泊かたはるに揃てしゆるわさのにや面白さ

運動帽

133 わらへあてなしの仕業てもおまぬしろとあか帽子の無手のたたか

い

大正三年一月九日付「沖毎」第二〇八四号

青島陥落

仲濱政揆

134 おもかこと敵も打ちとやひけふやかにもうれしさめ上も下も

135 たたかれは勝ひせめは直おとちよくもかかやちゆら国の光り

大正四年一月二八日付「新報」第五二七一号

比嘉賀徳君かみまかりけるをいたみて（琉歌）

正四位伊江朝眞

136 まことある人やことほきもなかく受て樂しみゆるためしやすか

137 わか歌のむしろおきやからす花や咲ちらち呉ため無情の嵐

具志頭朝香

138 敷島のみちにかたらたるとしや哀れ振別れてあの世参うちやみ

浦添朝宣

139 草葉ふみわけて行衛尋てもあはれきく物や浪の音声

大山朝眞

140 あたらみとり子のおとな面影も見たなかくれたる君とあはれ

稻福全名

141 いつもいかたれや月花の蔭に遊てのちのひる契りしやすか

渡慶次朝宣

142 人のいのちの浅間しやこからしに散る木の葉ころ

龜山朝奉

143 月毎に咲ちやることの葉の花とこの世もつれたる形見さらめ

大正四年一月三〇日付「新報」第五二七三号

比嘉賀徳君かみまかりけるをいたみて（琉歌）

名護朝直

144 あたら翠り子の生立も見たぬすてて先なため蓮のうてな

知念政置

145 月花のかけにおのかけや残ちあはれ先なため蓮のうてな

佐久本孟教

146 残す言の葉の花やなまても見る人の袖に匂やあすか

知念續昌

147 あたら月花の友もふり捨てて哀れ先いまちやめ死出が山路

屋嘉比政兄

148 月花の影にあすふたのしみもすててさきなたる君と衾れ

比嘉春株

149 戻らぬ旅にあはれ先なため朝夕かたらたる友もすてて

150 阿波根朝祥
月花の友部おしつれて今日や草葉たつねよす夢やあらね

151 與那原良儀
言葉の花の匂やこの世界に残ち隠れため蓮のうてな

152 伊江朝薫
のよしのあとて一人先なたかあたら月花の友と別て

153 伊江朝英
朝夕素立たる庭の若桜花も眺めらぬ捨ていもきやめ

154 森田孟徳
誰にひかされて月花の友も捨て先なたか死出か山路

大正四年二月一日付「新報」第五二七五号

比嘉賀徳君かみまかりけるをいたみて

美里朝珍

155 歌むしろ敷て遊たるとしの黄葉ふみわけて行きやる惜さ

當銘朝頼

156 はかなしや友にいとま声もすらぬあはれ先なため蓮のうてな
157 忘すられみあさ夕敷島のみちのあにとたのしたる君か名残

山城宗口

158 歌の友そろてまつる盃や草の蔭をとてうけてたほふれ
159 敷島のみちの友やふりすててさき立ひもちやみ蓮のうてな

大正四年一月一日付「新報」第五五四九号

奉祝歌

安慶名徳秀

160 今日や天加那志御即位の御祝千代八千代までんおかけ召れ

大正五年一月三日付「新報」第五六〇〇号

新年言志

岸本賀雅 八十年

161 若かへて我身の年かそて見れば嬉しさやそち千代のはしめ
若水

162 みすとみて起て若水よ汲は若かへる顔の浮ふうれしや
新年橋

163 新玉の年の美代の賑かや旭橋渡る人のしけさ

大正五年七月二五日付「新報」第五七九九号

山内盛熹君を追弔て

岳本岱嶺

164 浮世物ことや忘すて極楽のはちす葉の上に登ていもり

稻嶺盛治

165 浮世様様の事も振り捨てていな登ていまいみはすの台

吉里眞仁

166 よろつそなはりて浮世動かきやる人もいないりにくもていまいみ

賀數朝睦

167 あたら人も死出の別路にとめるしからみやないらぬ無常の世界や

比嘉共始

168 誰便て汲か今からの先や犬子根東りの神の流れ
169 二あげ三下げの歌の節節も学ぶ道中にすてていまいみ

浦添朝長

170 歌しちも美さ歌よてもよたしや世世の世世ととめ沙汰とのこる

大正五年七月二八日付「新報」第五八〇二号

愛鳥のあとを追ふて死んだ遊女の記事を読み

もとゐ

171 病故んやたらかなし籠鳥の跡とめてかまどあの世んじやみ

大正六年一月一日付「新報」第五九五三号

遠山雪

鉢嶺青口

172 はるはると見ゆる山の頂きに雲しのきつとる雪の美さ

173 雲と思なちやさはるはると見ゆる富士の頂きに積るみ雪

新年霽

八十一年岸本賀雅

174 今度巳のとしや世界報よのしるし立そむる霽綾の美らさ

175 老やかさねてもかにもうれしさめのかなるみ代のとしのはしめ

大正六年九月二四日付「新報」第六二二一号

琉球新報二十五周年を祝ひて

正四位男爵伊江朝眞

176 日日にみる人や千代かけて願ら生年ことの御祝たいもの

神山朝知

177 としの経ることに緑さしそひて千代にもへしける筆のはやし

渡慶次朝宣

178 嬉しさやよはひ重ねよることにはほひ世にましゆる筆のはやし

知念政置

179 嬉しこと菊の千代の色含てよろつ世に榮る文のはやし

高安朝常

180 はたちからあまる生れとしたいもの筆のはなさかる御祝しや口ら

龜山朝奉

181 先に生れたる恥かかす杜のまつよりもしける文のはやし

比嘉賀慶

182 二十から余る五年の御祝万代にさかれ文のはやし

屋嘉比政兄

183 竹のことすこく節もそろて根節かたまたる文のはやし

大山朝眞

184 世の中にさかす言の葉のはなや年のへることに匂ひ増さ

名護朝直

185 三たび巳の年のよわひへる筆のときはなる花や御世のすかた

花城朝忠

186 いろいろの花の匂ひたちましゆさ年月にさかる筆のはやし

名嘉地憲敷

187 としのへることに匂ひいや増さ日日にさきかはる筆のはやし

稻福全名

188 昨日今日とめはふた昔すきて生れたる巳年めくてきぎやめ

伊集治令

189 球のこと光たてていつまでも榮へいやましゆる文の売所

伊志嶺朝佐

190 四方のましようちに筆の露うけて咲る言の葉や蘭の匂ひ

長嶺宗恭

191 日日に咲ちかはる色色の花やよろつ世にさかる種子となゆさ

具志頭朝香

192 年かへる程に匂ひいやましゆることの葉の花やよよのゝかみ

當銘朝顯

193 朝ことに世界のありさまゆしらす筆のいさをしやかきりないさめ

梁枝

194 朝ことに咲るふみのはな匂ひかはて人人の心ひちゆさ

大正六年一月一七日付「新報」第六二六二号

小嶺幸之君を悼みて

山里永昌

実になゆることやなまからとしゆたす肝のこちむちやる人のをし

さ

いつもはきはぎとうちわらひわらひ話しゆたるすかた忘れくれし

や

大正六年一月二五日付「新報」第六二六九号

嶋内三郎君

笑門隠士

197 男ふりなかい肝のかねうちやてたんちゆとよまれる二番お役

鈴木邦義君

198 目に立ゆることやまだないらぬあすか所得税をてや男上げて

大正六年一月二九日付「新報」第六二七三号

知花朝章君

笑門隠士

199 お歳とてたいんす首里のためはかてつとめゆる人と手本さらめ

護得久朝惟君

200 順風てち船頭こころゆるすなよ時の間にあれる浮世渡中

大正七年一月七日付「新報」第六三〇九号

新年

山里永昌

201 こころあらたまの年やかさねてもはつかしやわ肝いつもわらへ

八十二年岸本賀雅

202 六七十とめは年や午のはひ八十二になたる年のうらめさ

大正七年一月二七日付「新報」第六三二九号

男爵伊江朝眞氏の還暦を祝ひて

具志頭朝香

203 きやほと嬉れしさかおみ子おみ孫の君か甲子としての今日の御祝

204 千世の数とゆる初めさめ君か緑子にかへるけふの御祝

比嘉賀慶

205 としの走馬のめくくる毎に寿の御酒乗てあけら

岳本岱嶺

206 六十一てすも夢の間にすきて又もくりかへす御願しやひら

渡慶次朝宣

207 嬉れしさやまつの千年あやかやいみとり子にかへる君かよわひ

山田有度

208 御誇らしや美しやうちお掛ほさへみしやうれよよにさた残すまれ

の御年

龜山朝奉

209 六十からあまるひととせや君かちよの坂のほるふもとさらめ

屋嘉比政兄

210 くりかへす年のけふの御祝日にまたもくりかへす御願しやひら

長嶺宗恭

211 常磐なる松の干としよりまさて君か万代やかきりないさらめ

212 百としも越てさかていまいる君か六十一とせや階のはしめ

伊集治令

213 みとり子のむかしくりかへち今日や千代のかすとゆるはつの御祝

大山朝眞

214 御果報あてさらめ御子孫そろてみとり子にかへる千世のさかえ

名護朝直

215 嬉れしさや君かときはなる松のみとり子にかへる千世のよわひ

216 空に列れ飛るつること干とせおみ子おみ孫もつれていまれ

伊江朝猷
花城朝忠

217 御願しきをらは御子御孫もさかてまた甲子の御祝みしやうれ

知念政置

218 嬉れしさや君か年ゆくり戻ちよろつ世にさかる龜のよわひ

仲尾次盛孝

219 二葉からなたる松のこと干とせみとりさしそへる御願しやひら

知念棚敦

220 御子御孫にみこしおされやひもものさかやすくのほていまふれ

知念績昌

221 万代にさかるときはなる松やみとりさしそへてもたへ清さ

宮城助政

222 おみ子おみまかのきやほと嬉れしさか御六十のの今日の御祝

大正七年二月一日付「新報」第六三四号

八十二年岸本賀雅

223 長閑なる今日やわらんちやか心年や重ねても若くなよさ

大正七年四月一日付「新報」第六三九九号

三月十八日當銘朝頼氏還曆を祝て

正四位男爵伊江朝眞

224 花みしちあすひ月にうたうたてももの坂までもとものにのほら

具志頭朝香

225 みとり子にかへる祝のさかつちや飲ことに千世の句のたちゆさ

龜山朝奉

226 めくる春駒やくりかへしかへしちよの坂までも登ていもれ

山田有度

227 親のためともていのる子のきもにかねてしられゆさ君か千年

比嘉賀慶

228 今日や六十一の御祝しち願ら七八こへて百十までも

翁長良才

229 君か甲子としや千代のつるかめも御友さんともて躍るうれしや

高江洲昌壯

230 かねも嬉れしさめ君か甲子としのいはひくむ酒のわ肝ひらち

比嘉次郎

231 御身しち御身かなしくにみしやうちもとしの坂ものほていもれ

花城朝忠

232 甲子としの御祝まつに千世かけて老の坂やすくのほていもれ

大正七年四月二一日付「新報」第六四一〇号

渡嘉敷通昆氏を悼て

芝圃

233 またもくりかへちももの坂までもやすやすとのほていまひらとめ

は

具志頭朝香

234 あたら月はなもともになかめらぬふやかりて行る君とあはれ

山田有度

235 あの世先なても君かまこころのいつもわすられめおみとましゆる

稻福全名

236 互に片腕と一人たのみたのみももの坂のほる契りしやすか

伊集治令

237 ゆしちゆしまらぬあてなしの孫の成長なるすかた見たないまちや

み

知念政置

238 たるによろつ世やよつて先なたかくり戻すとの祝もしやすか

屋比久政兄

239 互に遊ふたる敷島の道もすてて先なため死出が山路

渡慶次朝宣

240 やかて咲花も見たなしよて野辺の草にかくりたる人とあはれ

龜山朝奉

241 まこのおひたちも気にかかれなからふりすてて行るひとと哀れ

佐久本孟教

242 ともにおしつれて行衛たつぬれはあわれなく虫の声ときちゆる

名護朝直

243 忘れてやりしちもおひ出夢になる友の名残たちゆさ

大山朝眞

244 月花のかけにゆらて遊ふたる君もいなむかし夢になため

比嘉春株

245 あたら玉の緒も無常の山らしに咲ゆちらされる人とあはれ

仲尾次盛孝

246 この世わかれたる君かまこころや死出か闇てらち安くまうきやら

知念棚敦

247 是までや互に月花に遊ていとま声もないらぬあの世いまうきやか

宮城助政

248 浮世ものこともゆらてかたらたるあれしよのむかし忘れこれしや
249 かなしおみ孫のものおもる間のとし月もまたぬあの世いまうちや

か